

世界の食料安全保障におけるラテンアメリカの グローバル・プレーヤーとしての役割： 日本への貢献度

桑山幹夫 *

【要旨】本レポートは、世界の食料生産および貿易における LAC 地域のグローバル・プレーヤーとしての役割、LAC の日本の食料安全保障に関する重要性についての論考である。第 II 節では LAC 経済における農業・牧畜・水産業の重要性について概説したうえで、食料貿易上で余剰がある黒字輸出国と赤字輸入国が混在する地域の特異性、域内での食料安全保障に関する地域統合の可能性について考察する。第 III 節では、FAO が OECD と共に発表する年次報告書（2024 年版）をもとに、LAC の食料主要供給国としての位置づけや今後の見通しについて畜産物、農産物、水産物の 3 部門に分けて解説する。第 IV 節は、LAC 産の農水産品が日本の食料輸入に占める割合を上位 40 品目別（HS6 衍）に分析しながら、LAC 産品の価格競争力、LAC の日本の食料安全保障への貢献について検証する。さらに、日本の対 LAC 主要農産品輸出の市場アクセスに関して、日本が世界に適用する基本関税率および WTO 協定関税率、日本・メキシコ経済連携協定（EPA）、日本・チリ EPA、日本・ペルー EPA、これらラテンアメリカ 3 か国が加盟する「環太平洋パートナーシップに関する包括的及び先進的な協定」（CPTPP）の関税率、の比較分析である。第 V 節では、2024 年 12 月の EU・メルコスールの新合意を踏まえて、懸案の日本・メルコスール EPA に対するインプリケーションについて考察する。

キーワード：中南米、食料安全保障、SDG 目標 2、日本・メルコスール EPA、関税障壁

* ラテンアメリカ協会理事、ラテンアメリカ・カリブ研究所シニア・リサーチフェロー。神戸大学経済経営研究所リサーチフェロー。本稿で示された見解は著者個人のものであり、必ずしもラテンアメリカ協会の見解を反映するものではない。正確を期したが、誤りがあれば筆者の責に帰す。

I. はじめに

世界全体としてはその人口を養うに十分な食料が生産されてはいるものの、各地で飢餓の問題が頻繁に起こっている¹。世界の穀物生産は緩やかだが安定的に伸びている一方で、世界で飢餓状態（栄養失調）にある人口のシェアは2019年の7.9%から2022年の9.2%（約7億3,500万人）に達し、コロナ禍以前よりも飢餓に直面している人口が1億2,200万人増えた（OECD/FAO 2024）。2030年になっても5億9,000万人が慢性的な飢餓状態に陥っている可能性がある（FAO 2024a）。世界各地で飢餓が蔓延している背景には、国内および国家間での分配に問題があることを意味している。フード・バリュー・チェーンにおける食品の損失（loss）と廃棄（waste）も飢餓の蔓延に繋がっている実情もある（OECD/FAO 2024）。

世界の食料の需要・供給のギャップを埋めて生産・消費のミスマッチを解消していく上で、世界貿易が極めて重要な役割を

果たすことはよく知られている。2000～21年の20年間に世界の食料貿易は3.5倍伸びて、その総額は1兆7,000億ドルに達した。過去40年で国境を越えるカロリー量は4.2倍に増えた²。現在、世界で消費されるカロリーの4分の1を輸入に頼っているのが現状だ。それを反映して、食料が世界の商品（財）貿易に占める割合が2000年の6%から2023年の8%まで伸びている（UNCTAD 2024）。これらの数値は、近年に食料貿易の重要性がさらに高まってきていることを浮き彫りにしている（UNCTAD 2024、ECLAC 2024、Granados 2024）。

このような世界の食料事情のなか、世界有数の食料純輸出国・地域として知られるラテンアメリカ・カリブ（以下LACと略称）は、これからも世界の食料安全保障に重要な役割を果たしていくと期待される。直近の2021～23年でみると、LAC地域の農業・畜産・漁業が世界の農水産生産および貿易額に占める割合はそれぞれ13%、18%となっており、LACの世界GDPシェア7%をLACが大きく上回っている。加えて、LAC

¹ FAOは、2022年の食料過不足の「限界値（Minimum daily requirement of calories: MDER）」を以下のように定義している。世界全体（1人1日当たり1,830kcal）、高位中所得経済圏（1877kcal）、中低所得経済圏（1,785kcal）、低所得経済圏（1,718kcal）としている。LAC諸国の場合には1,853kcalとなっている（<https://ourworldindata.org/grapher/minimum-requirement-calories>）。世界の食料生産量をカロリーベースに換算すると、栄養失調を避けるために必要な1,830kcalをはるかに上回る2,980kcalに相当する生産量となる。だが、その3分の1が損失したり廃棄されている（Granados 2024）。

² 近年では特に加工食品の貿易が増えてきている。例えば、野菜や果物の缶詰、朝食用シリアル、包装済み食品などの加工食品の付加価値は高いが、糖分や塩分が多く含まれる可能性もある。先進国では加工食品の輸入割合が高く、食料品輸入全体の約48%を占めるのに対し、発展途上国では約35%である（UNCTAD 2024）。

では輸出される生産物の比率が高まっており、農水産品の生産の約 70% が輸出されている（ECLAC 2024、ECLAC/FAO/IICA 2023）。

ラテンアメリカ（食料の純輸入国が多いカリブ地域を除く）は世界が飢餓と栄養不良と闘うために必要な食料市場におけるグローバル・プレーヤーに成長した。ラテンアメリカ産の農水産物が世界生産に占める割合は、農産品では 14%、畜産品で 15%、魚介類で 10% 弱とそれほど高くはないが、大豆（63%）、砂糖（54%）、とうもろこし（48%）、牛肉（41%）、鶏肉（32%）のように、世界輸出額に占める割合が 2022 年の時点で突出して高い品目が幾つかある。小麦、豚肉、魚介類においてもラテンアメリカの世界の生産・輸出シェアは上昇すると予想される。ラテンアメリカ産の世界の食料生産・貿易占有率は今後 10 年でさらに高まる見通しである（OECD/FAO 2024）。

その一方で、LAC 諸国は、自国の食料安全保障の観点から大きな課題に直面していることも事実である（IFPRI 2024）。全ての LAC 諸国が食料貿易において純輸出国で黒字を計上しているわけではない。南米が LAC 地域の輸出黒字の大部分を占める反面、カリブ地域は食料貿易において長期にわたり赤字となっている（ECLAC 2024）。LAC 地域全体でみると地域人口に必須カロリーを確保するのに十分な食料が生産されてはいるが、人口の 6.2%（4,100 万人）が飢餓に見舞われ³、同地域人口の 40% 弱が「食料不安」⁴に苦しんでいる⁵（FAO, IFAD, PAHO, UNICEF & WFP 2023）。

近年には気候変動、自然災害、物価高騰により、LAC 諸国の食料不安がさらに高まっている。近年の高い食料価格インフレを反映して購買力が低下し、マクロ経済の不安定性によって食料事情が悪化している国も少なくない。コロナ禍後には世界各地で

³ LAC 地域では、2023 年に 4,100 万人（LAC 地域の人口の 6.2%）が飢餓下にある。2019 年比で 470 万人増となる。そのうち 2,280 万人（56%）が南米、1,050 万人（26%）が中米とメキシコ、770 万人（19%）がカリブ諸国に居住している。カリブ地域の飢餓人口（17.2%）は、南米（5.2%）、中米・メキシコ（5.8%）の約 3 倍にあたる（ECLAC 2024）。

⁴ 食料不安（food insecurity）の度合いには、中等度と重度の 2 段階があり、食料の入手状況や質、量によって評価される。不安の度合いが中程度の食料不安とは、人間が食料を得る能力について不確実性に直面し、金銭やその他の資源の不足により、消費する食料の質や量を減らさざるを得ない状況を指す。重度の食料不安は、一年の間のある時点での、食料を使い果たし、飢餓を経験するか、最も極端な場合には一日以上食料を摂取できない状態を指す（ECLAC 2024）。

⁵ 2022 年の数値でみると、LAC 人口の 37.5%（2 億 4,780 万人）が中度または重度の食料不安の状態にあった。これは、世界全体の 29.6% と比べると高い水準となる。域内の構成でみると、南米の 1 億 5,900 万人、メソアメリカの 6,190 万人、カリブ地域の 2,690 万人となる。重度の食料不安は、同地域の人口の 12.6%（8,340 万人）に影響を与えた。南米では 12.7%（5,540 万人）、中米・メキシコでは 8.6%（1,540 万人）、カリブ地域では 28.2%（1,250 万人）に達した。LAC 地域では中程度または重度の食料不安は、男性よりも女性に大きな影響を及ぼす（FAO, IFAD, PAHO, UNICEF & WFP 2023）。

国内サプライチェーンの整備に重点が置かれるようになった（ECLAC 2024、Granados 2024）。今後 10 年間は輸出主導の成長が見込まれるため、域内外での関税・非関税障壁の軽減・撤廃に加えて、投入資材の効率的使用、気候変動の緩和・適応戦略の成功、環境持続可能性への重点的な取り組みが不可欠となる（OECD/FAO 2024、FAO 2024b、UNICEF and WFP 2024）。

食料安全保障の促進は、「2030 年までに、飢餓をなくし、すべての人々、特に貧困層と乳幼児を含む脆弱な状況にある人々が、安全で栄養価が高く、十分な食料を一年中入手できるようにする」ことが持続可能な開発目標（SDGs）の目標 2.1 に掲げられている。しかし、世界でみると、近年の世界経済を襲った相次ぐ危機により、この目標の達成は後退せざるを得ない状況となっている。世界の飢餓と栄養不良と闘うために世界は LAC 地域を必要としているとして、ブラジル政府は 2024 年 11 月の G20 会議長国として「飢餓と貧困に対するグローバル・アライアンス」構想を提言した（FAO 2024b、G20 2024、IFPRI 2024）。同構想に向けて米州開発銀行が最大 250 億ドルの融資を表明している⁶（IADB 2024）。

II. 世界の食料安全保障における LAC 地域の位置づけ

LAC 地域における農業・畜産・水産の 3 大産業は合わせて地域 GDP の 5%、商品（財）輸出総額の 22% を占めており、人口の 15 % を雇用する主要産業である（ECLAC/FAO/IICA 2023）。LAC 地域全体でみると、2010 年代から食料貿易の余剰が増え、輸出額から輸入額を引いた農產品関連の貿易収支の黒字幅が拡大しており、世界最大の食糧純輸出地域となった（OECD/FAO 2024）。名目ドルでみると、食料輸出額は 2010～22 年に年平均で 6.3% 拡大し、2022 年に過去最高の 3,490 億ドルを記録した。一方で、同地域の食料輸入は 6.3% の同率で拡大し、2022 年に 1,360 億ドルに上った。国別でみると、ブラジル、アルゼンチン、メキシコが 2022 年の世界の食料品輸出国上位 10 か国にランクインする。ブラジルの世界食料輸出額シェアは 7% で 3 位、アルゼンチンは 3% で 7 位、メキシコは 2% で 9 位につける。LAC は、世界の食料輸出の 35% を占める欧州連合（EU）加盟 27 か国、9% を占めるアメリカ合衆国と並ぶ世界有数の食料供給地に成長した（ECLAC 2024）。

⁶ 米州開発銀行は、「Global Alliance against Hunger and Poverty」構想に参加し、各国主導のプログラムを支援するため、最大 250 億ドル（1,400 億レアル）の資金を提供することを約束している。新たに承認されたプロジェクトの少なくとも 50% は、女性、アフリカ系住民、先住民族など、貧困の影響を最も受けている脆弱な人々を直接対象とすることを確約した。イノベーションとベンチャーキャピタルの部門に融資する IDB Lab は、承認された新規プロジェクトの 60% が貧困に直接焦点を当てる（IADB 2024）。

A. 食料の純輸出国と純輸入国が混在する LAC 地域

LAC33 か国のうち、地域人口の 90%弱を占める 15 か国が輸入よりも輸出が多い食料純輸出国となっている。特に、南米諸国の農産物貿易額の黒字が大きい。赤字国は 18 か国あり、中米のパナマ、エルサルバドル、また多くのカリブ諸国が農産物の純輸入国となっている⁷。特に、カリブ諸国の輸入依存度が高い。2020~22 年に LAC15 か国（うち 12 か国はカリブ諸国）は食料輸入額が輸出額を 20%近く超える赤字国となっている（ECLAC 2024）。

LAC 諸国の域内外の食料貿易相手国は輸出と輸入の間で大きく異なる。輸出の場合、アメリカ合衆国（2022 年には LAC の食料輸出額の 21%）、中国（19%）、その他のアジア諸国（21%）などの域外国・地域が主要輸出先国である。LAC 域内での食料貿易は、域内商品輸出総額の 14%を占める。輸入相手国は輸出に比べると米州に集中しており、2022 年には LAC 域内国から 41%が、アメリカ合衆国から 37%が調達された。

メキシコとカリブ諸国の主な輸入先はアメリカ合衆国である。品目別では、南米は多くの主要食料において黒字を計上する。中米・メキシコは、果物・野菜と加工食品で最大の黒字、穀物・油糧種子では大幅赤字となっている。一方で、カリブ諸国は、大半の農產品で赤字となっている。穀物の輸入依存率については、ドミニカ共和国を除くカリブ諸国では穀物消費の 86%~100%が輸入されている（ECLAC 2024）。

B. 域内貿易拡充の可能性と地域統合

LAC 域内で食料安全保障の状況が悪化している背景には、コロナ禍、ロシア・ウクライナ戦争や中近東紛争、そして過去 3 年間で平均 15%を記録した食料価格インフレなどがある（OECD/FAO 2024）。LAC 諸国は、健康的な食生活をおくる経費が世界でも高い地域の一つであり、購買力平価（PPP）で 1 人 1 日当たり 4.56 ドルとなり、世界平均を 15%ほど上回る。カリブ諸国では、1 人 1 日当たり 5.16 ドルで、世界平均を 30%上回る（ECLAC 2024）。

⁷ 2020~22 年の 3 年平均でみると、LAC 域内では 15 か国が食料貿易で黒字を計上した。黒字国グループには、ベネズエラ、メキシコ、中米諸国（エルサルバドルとパナマを除く）、ガイアナ（カリブ諸国の中でも唯一の黒字国）および全ての南米諸国が含まれる。赤字国は 18 か国で、数としては黒字国より多い。2022 年には LAC 人口の 88%が黒字国グループに居住していた一方で、カリブ人口の 98%が赤字国の居住者であった。アルゼンチン、エクアドル、ニカラグア、パラグアイ、ウルグアイでは 2020~22 年に食料の純輸出額が GDP の 8%から 14%を占めた。一方で、カリブ 9 か国では、食料貿易の赤字は GDP の 5%から 9%に相当する。各国の食料貿易収支は地域では 2010 年以降は安定しているが、メキシコは例外で 2014 年まで赤字であったのが 2015 年に黒字に転じ、それ以来黒字を計上している（ECLAC 2024）。

域内貿易の対象となる食料品は、輸出と輸入で重複することが多い。大豆、大豆かす、大豆油、とうもろこし、小麦、牛肉、豚肉、鶏肉が域内の主要食料輸出・輸入品となっている。2020～22年平均では、大豆油の輸入の4分の3、生鮮または冷蔵牛肉の輸入の3分の2、豆類、コメ、大豆の輸入の5割、小麦の輸入の約4割、とうもろこしの輸入の3分の1、粉ミルクと鶏肉の輸入の4分の1がLAC域内から調達された。これらの商品は人間の栄養摂取には極めて重要であるが、とうもろこし、大豆、大豆かすが家畜や家禽の飼料として、大豆油、とうもろこし、サトウキビがバイオ燃料の生産に使用されていることも食料の供給に影響を与える（ECLAC 2024）。

地域の食料供給をより安定的かつ低コストで行うためには、地域統合の強化は不可欠な要素である（ECLAC 2024、Granados and Opertti 2023）。統合された地市場は、近隣国からの食料および投入財の供給を拡大し、第三市場からの供給ショックを緩衝する。地域統合の強化は生産チェーンの構築を促進することから域内の食料安全保障

の向上につながる。にもかかわらず、地域内での食料安全保障の強化に対して幾つかの関税・非関税障壁が存在する。LAC地域の農産品に適用される最惠国関税の平均は2023年に13.6%で、非農産品の関税率（7.8%）より6ポイント近く高い。多くのカリブ諸国では、農産物の平均関税率は約20%の高率であり、なかにはそれを超える税率を課す国もある。加えて、カリブ諸国では海運の接続性の問題、高運賃、限られた輸送・物流インフラが食料貿易の大きな障壁となっている。さらに、食料貿易では非関税障壁（主に衛生植物検疫要件やその他の技術規制）関連の貿易取引コストが高い。世界全体でみると、物流に由来するコストは製造品では4%未満だが、農産物では17%の関税に相当する。LAC諸国では、農業・狩猟・漁業や加工食品部門において域内貿易で最も高い非関税障壁（税率に換算すると、それぞれ8.4%、5.6%）が課されており、関税障壁や非関税障壁の削減・撤廃が望まれる。これらのコストを低減するには「貿易円滑化」措置の強化が必要となってくる⁸（ECLAC 2024、Granados and Opertti 2023）。

⁸ ECLAC（2024）は、域内の食料貿易の拡充に向けて、① 貿易の円滑化措置（特に海外貿易のための電子化された「単一の窓口の完全実施）、② 貿易規制の調和・一律化（衛生、植物検疫、技術基準の調和または相互承認）、③ 特にカリブ諸国における食品貿易ロジスティクスの改善（例えば、バルバドスとガイアナを拠点とする小地域食品流通センターの設立プロジェクト）、④ LAC諸国間の特恵貿易協定網の拡大による柔軟かつ段階的な開放政策、などの政策を提唱する。加えて、LAC諸国は世界の食料安全保障に向けての自国の食料輸出の貢献をアピールするために多国間フォーラムでの協力体制を強化し、そうすることで、持続可能な食料生産への移行を支援するための投資・融資が期待できるとしている。

III. 世界の農水産品生産・輸出から みたラテンアメリカの重要性と その役割

A. 概要

FAO の統計（2022 年）によれば、ラテンアメリカ（食料貿易で赤字を計上するカリブ地域を除く）が世界の穀物生産量に占める割合においては「大豆」（「ハーモナイズド・システム（HS）コード（関税分類番号）」1201）が突出して高い。ラテンアメリカ全

体で世界の大豆生産量の 53.0%を担う（表－1）。第 1 位のブラジル（世界の大豆生産量の 34.6%）を筆頭に、第 3 位のアルゼンチン（12.6%）、第 8 位のパラグアイ（1.3%）、第 9 位のボリビア（1.0%）の 4 か国が世界上位 10 か国リストに顔を出す（附属表－1）。世界情勢によっては大豆の安定供給に影響を及ぼしかねない第 2 位のアメリカ合衆国（33.4%）に中国（5.8%）、ロシア（1.7%）、ウクライナ（1.0%）を合わせたシェアの 41.9%を大きく上回る⁹。

表－1：農水産品の世界生産量と輸出量にラテンアメリカの占める割合（2022 年）、
2024～33 年成長率予測、主要品目別
(1000 トン、パーセント)

品目	世界 対 ラテンアメリカ	生産量 (1000 トン)		成長率予測(%)	輸出量 (1000 トン)		成長率予測(%)
		2021-23 (暫定 値) 年平均	世界総量に 占める割合		2021-23 (暫定 値) 年平均	世界総量に占 める割合	
小麦	世界全体	788,257	100.0	1.02	193,894	100.0	1.39
	ラテンアメリカ	33,129	4.2	1.73	14,030	7.2	2.98
とうもろこし	世界全体	1,214,664	100.0	1.19	182,647	100.0	1.75
	ラテンアメリカ	223,963	18.4	1.73	86,781	47.5	2.47
大豆	世界全体	379,866	100.0	0.82	165,989	100	0.52
	ラテンアメリカ	201,504	53.0	0.82	105,074	63.3	0.48
砂糖	世界全体	177,728	100.0	1.07	66,549	100.0	1.32
	ラテンアメリカ	58,635	33.0	0.98	35,864	53.9	1.24
牛肉	世界全体	73,562	100.0	1.11	13,484	100.0	0.94
	ラテンアメリカ	18,053	24.5	0.87	5,526	41.0	1.86
豚肉	世界全体	121,830	100.0	0.52	11,429	100.0	0.29
	ラテンアメリカ	9,598	7.9	1.35	1,627	14.2	-0.19
鶏肉	世界全体	138,748	100.0	1.38	15,826	100.0	1.08
	ラテンアメリカ	29,291	21.1	1.44	5,002	31.6	1.24
魚・甲殻類・軟体動物	世界全体	184,623	100.0	1.1	43,443	100.0	0.65
	ラテンアメリカ	16,993	9.2	0.61	5,766	13.3	0.74

注：2023 年の値は暫定値。

出所：OECD/FAO（2024）、Annex C. Statistical Annex より筆者作成。

⁹ トランプ大統領が第一次政権下で中国に対してアメリカ産の小麦や大豆などに報復関税を課したように、米中国間で貿易戦争が再燃すれば、これまで農産品の中国への輸出を拡大してきたアルゼンチンやブラジルにとって追い風となる可能性もある（日本経済新聞 2024）。

大豆を輸出の視点からみると、第1位の
ブラジル（世界輸出量の50.1%）、3位のアルゼンチン（3.3%）、5位のウルグアイ（1.9%）、6位のパラグアイ（1.4%）、10位のボリビア（0.4%）の5か国の合計シェアは世界輸出量の57.1%に達する（付属表一
2）。中国は大豆生産の大半を国内消費に向
けている。輸出で第2位のアメリカ合衆国
(36.4%)、7位のウクライナ(1.3%)、9位
のロシア(0.5%)の輸出量は合わせて
38.2%となっており、ラテンアメリカのシ
エアを19%ポイントほど下回る（付属表一
2）。輸出額でみても、ブラジル、アルゼン
チン、パラグアイ、ウルグアイの4か国の
世界占有率は合わせて56.3%に上る（表一
2）。

生産・輸出の視点からして大豆と並んで
重要な品目は「大豆油」(HS1507)である。
生産量でみると、中国、アメリカ合衆国に
次いでブラジル（世界3位）、アルゼンチン
(4位)、メキシコ(6位)が上位10か国リ
ストに顔を出す。これらラテンアメリカ3
か国が世界の大豆油生産量の33.2%を担う
(付属表一1)。大豆油の輸出国としてのラ
テンアメリカの重要性はさらに高く、アル
ゼンチン（世界輸出量で1位）、ブラジル(2
位)、ボリビア(5位)、パラグアイ(7位)
の4か国を合わせたラテンアメリカのシ
エアは63.0%に上る（付属表一2）。輸出額で
みても、アルゼンチンとブラジルのシエア

は51.9%を占める（表一2）。すなわち、ラ
テンアメリカは大豆および大豆油の世界生
産と輸出の3分の2を占める世界最大のサ
プライヤーである。大豆油は食料需要の高
まりに加え、バイオ燃料としての需要が伸
びている。

「とうもろこし」(HS1005)については、
ラテンアメリカ全体で世界生産量の18.4%
を担う（表一1）。上位10か国ランキングで
は1位のアメリカ合衆国（世界生産の
30.0%）、2位の中国（23.8%）に次いで3
位のブラジル(9.4%)、4位のアルゼンチン
(5.1%)、6位のメキシコ(2.3%)が上位
10か国リストに入る（付属表一1）。これら
のラテンアメリカ諸国はウクライナやロシ
アを凌ぐ生産量を誇る。一方で、ラテンア
メリカ全体が世界輸出量に占める割合は
47.5%に上る。上位10か国輸出国ランキン
グでは、アメリカ合衆国（世界輸出量の
28.0%）に次いで2位のブラジル(20.7%)、
3位のアルゼンチン(16.9%)、7位のパラ
グアイ(2.2%)の3か国を合わせて世界輸
39.8%を担う。パラグアイはウクライナに
は及ばないが、ルーマニアやフランスと肩
を並べるほどの輸出国である（付属表一2）
輸出額でみると、ブラジル、アルゼンチン2
か国を合わせて世界輸出の32.2%に上る
(表一2)。ラテンアメリカが生産量に占め
る割合はそれほど高くはないが、輸出量で
は約半分、輸出額では世界の3分の1を担
う主要供給元となっている。

表—2：ラテンアメリカ：主要食料品の世界輸出ランキングとシェア（2022年）
(輸出額によるランキング、パーセント)

HS品目コード	品目名	国名	世界輸出国ランク	世界輸出に占める割合(パーセント)
02	肉及び食用のくず肉	ブラジル	1	14.5
0201	牛肉（生鮮・冷蔵）	メキシコ	6	6.1
0202	牛肉（冷凍）	ブラジル	1	28.1
0203	豚肉（生鮮・冷蔵・冷凍）	ブラジル	7	7.1
0207	鶏肉（生鮮・冷蔵・冷凍）	ブラジル	1	24.6
03	魚並びに甲殻類、軟体動物及びその他の水棲無脊椎動物	エクアドル チリ	3 6	5.7 5.1
0302	魚（新鮮・冷蔵）	チリ	4	4.1
0303	魚（冷凍）	チリ	3	7.4
0306	甲殻類（生鮮・冷蔵・冷凍・乾燥・塩水漬け）	エクアドル アルゼンチン	1 8	21.9 2.5
07	食用の野菜、根及び塊茎	メキシコ	2	10.8
071333	たまねぎ、シャロット、にんにく、リーキその他 のねぎ属の野菜（生鮮・冷蔵）	アルゼンチン ニカラグア	1 5	14.2 6.8
08	食用の果実及びナット、かんきつ類の果皮並びに メロンの皮	メキシコ チリ ペルー	3 4 9	6.3 5.8 3.4
10	穀物	アルゼンチン ブラジル	2 4	8.0 7.7
1001	小麦及びメスリン	アルゼンチン	6	4.6
1005	とうもろこし	ブラジル アルゼンチン	2 3	19.5 13.7
1006	米	ブラジル	9	2.2
12	採油用の種及び果実、各種の種及び果実、工業用 又は医薬用の植物並びにわら及び飼料用植物	ブラジル アルゼンチン ウルグアイ	1 5 10	30.9 2.8 1.4
1201	大豆	ブラジル アルゼンチン ウルグアイ パラグアイ	1 3 5 6	49.7 3.3 2.0 1.3
15	動物性、植物性又は微生物性の油脂及びその分解 生産物	アルゼンチン ブラジル	4 10	4.4 2.8
1507	大豆油及びその分別物	アルゼンチン ブラジル	1 2	29.2 22.7
17	糖類及び砂糖菓子	ブラジル メキシコ	1 8	19.3 4.1
19	穀物、穀粉、でん粉又はミルクの調製品及びベーカリー製品	メキシコ	9	3.4

注：各品目の世界輸出上位10か国にランクインする国のみを対象とする。

出所：ECLAC（2024）、Cuadro II.2（115頁）から抜粋。

農産品貿易においてラテンアメリカの存在感が大きいのが「砂糖」(HS17)である。ラテンアメリカが世界の砂糖（サトウキビ由来のエタノールを含む）生産量および輸出量に占める割合は、それぞれ 33.0%、53.9%に達する（付属表-1、2）。特にサトウキビを原料とする砂糖のシェアが高く、ブラジルが世界 1 位（世界生産のシェア 37.7%）の生産量を誇る。生産量ではブラジルには及ばないが、メキシコが 6 位(2.9%)、コロンビアが 7 位 (1.8%) に位置する（表-1、付属表-2）。サトウキビ砂糖の輸出国上位ランキングにはコスタリカが 10 位に入る。一方で、ラテンアメリカのテンサイ（サトウダイコン）生産・輸出シェアは相対的に低い。また、メキシコはドイツ、中国に次いで世界 3 位の砂糖菓子の輸出国である。輸出額でみても、糖類および砂糖菓子においては、ブラジルは 1 位（世界の輸出額の 19.3%）、メキシコは 8 位 (4.1%) につけている。

ラテンアメリカの小麦 (HS1001) に関する生産および輸出の世界占有率は、それぞれ 4.2%、7.2% に過ぎない。生産量でみると、アルゼンチンが生産量で世界 10 位、輸出量で 6 位につけている。輸出額では、アルゼンチンの世界輸出額シェアは 4.2% なっている。食用野菜、根、及び塊茎 (HS07) については、輸出額でメキシコが 2 位で世界シェアの 10.8% を占める。玉ねぎ、にんにく、ネギ (HS071333) においては、アル

ゼンチン (1 位)、ニカラグア (5 位) が上位 10 か国にランクインしている（表-2）。

農産品のなかで世界の生産および輸出において特にラテンアメリカのシェアが高いのがコーヒーである。生産量でみると、1 位のブラジル（世界生産量の 29.4%）、4 位のコロンビア (6.2%)、7 位のペルー (3.3%)、9 位のホンジュラス (2.9%) が上位 10 か国に位置する。輸出額でみると、ブラジル（世界輸出額の 27.4%）、コロンビア (8.1%)、ホンジュラス (4.0%) が上位 10 か国リストに仲間入りする。生産量、輸出量ともに、ブラジルは 2 位のベトナムを大きく引き離す（付属表-2）。

ラテンアメリカは畜産部門で世界生産量の 15%を占める。肉類 (HS02) の内訳では、ラテンアメリカは世界の牛肉 (HS0201, 0202) 生産量の 25%、輸出量の 41%を担う世界有数の輸出地域となっている。鶏肉 (HS0207) では世界生産の 21%、世界輸出の 32%がラテンアメリカから供給される。豚肉 (HS0207) の場合、世界生産の 8%、世界輸出の 14%に相当する（表-1）。ブラジルは肉類 (HS02) では世界輸出国ランキング 1 位、牛肉（冷凍）(HS0202) および鶏肉（生鮮・冷蔵・冷凍）(0207) 輸出量では 1 位、豚肉（生鮮・冷蔵・冷凍）(0203) では 7 位にランクされる。牛肉（生鮮・冷蔵）(0201) に関しては、メキシコが 6 位に位置する。輸出額でみても、ブラジルだけ

で世界の牛肉（冷凍）輸出の 28.1%、鶏肉（生鮮・冷蔵・冷凍）輸出の 24.5%を供給する主要輸出国である（表-2）。

一方、魚・甲殻類・軟體動物（HS03）においては、エクアドルとチリがそれぞれ世界ランキング 3 位、6 位につける。チリはサーモンやマスを中心に、魚（新鮮・冷凍：HS3002）および魚（冷蔵）（HS0303）において世界の主要輸出国である。甲殻類（HS0306）はエクアドルにとって石油に次ぐ第 2 位の輸出産業であり、対世界輸出額の 21.9%を占める世界最大の輸出国である。甲殻類に限ってみると、アルゼンチンは世界ランク 8 位に位置する（表-2）。

B. 今後の見通し

経済協力開発機構（OECD）と国連世界食糧農業機構（FAO）が加盟国やその他の国際機関と協力して共同で作成する年次報告書『OECD-FAO Agricultural Outlook 2024-2033』¹⁰（OECD/FAO 2024）の 2024 年度版が 7 月に発表された。同報告書は、世界全体と地域別に、農業・水産業における生産・消費、輸出の動向、2033 年までの見通

しと政策提案をおこなっている。以下、ラテンアメリカを中心に LAC 諸国界の食料安全保障に関わる情報について整理しておく。

FAO は、LAC 地域における農業・牧畜・水産の 3 大産業の生産は 2033 年までに 15%拡大すると予測する。この伸び率の約 5 割が農産物の生産拡大に起因するものである。畜産部門の拡大は 12%に留まるのに対し、農産物生産は 14%の拡大となる。魚介類の生産量では 23%の増加が見込まれる。これらの予測数値を合わせると、農産物が 2033 年に農畜水産業の生産総量に占める割合は 48%、畜産物が 39%、魚介類が 14%と予測される。

生産が 2033 年までに堅調に増大し、LAC が世界輸出に占める割合がさらに高まると予想される品目が幾つかある。大豆は世界輸出の 66%、砂糖は 56%、プロテインミール（高たんぱく家禽用ミール餌¹¹）は 54%、とうもろこしは 48%、牛肉は 43%、魚粉は 40%、鶏肉は 31%、果物は 24%に達すると予測される。特に、大豆、砂糖、牛肉につ

¹⁰ 同報告書に関する日本語文献として、「OECD-FAO 農業見通し 2024-2033 エグゼクティブ・サマリー」を参照されたい。

¹¹ 油糧種子の碎粉による高蛋白飼料（protein meal）の世界生産は、大豆ミールが 3 分の 2 超を占める。中国と欧州連合（EU）では、主にブラジル産とアメリカ産の大豆の碎粉から生産されている。その他の主要生産国（アルゼンチン、ブラジル、インド、アメリカ合衆国）では、国産大豆とその他の油糧種子が主流である。プロテインミール関連の世界貿易の伸び率予測は 2024~33 年に年率 0.8%となってい。アルゼンチンは、引き続き世界最大のミール輸出国となる見通しである。プロテインミールの世界的な輸入増加の 90%以上はアジア、特に畜産が増加している東南アジアで起こると予測される。

いては世界輸出シェアのさらなる上昇が見込まれる。

勿論、2023～33年のLAC地域での生産増減率は品目によって異なる。LACにおける小麦、とうもろこし、豚肉、鶏肉の生産増加率は世界のそれを上回る一方で、砂糖、牛肉、砂糖は世界の増加率を下回る見込みである。大豆に関しては、世界とほぼ同率の生産拡大が予想される。輸出量でみたLACの増加率は、小麦、とうもろこし、牛肉、鶏肉、魚、甲殻類、軟体動物で世界の増加率を上回る一方、大豆、砂糖では世界の増加率より低く、豚肉においては2033年まで生産減が予想される。

LACの農業開発は、農地の拡大と生産プロセスの集約化を組み合わせた生産体制の強化によるものである。LACの農業利用面積は世界最大であり、農作物部門に限ってみても2033年までに約700万ヘクタールの農地拡大が予想される。拡大が予測される農地面積のほぼ60%がブラジルでの開発となる見込みである。収穫面積の増加が土地利用面積のほぼ2倍と予測される背景には二毛作の普及がある。大豆は追加面積の31%を占め、25%がとうもろこしに割り

当てられる。小麦向けの追加面積は、ロシア・ウクライナ戦争が続くなか、黒海地域からの供給ギャップを埋める可能性を秘めている。

LACでは大豆やとうもろこしの生産が2033年までに拡大することから、同地域内での供給変動は世界価格に大きな影響を与える。気候変動が顕著化するなか、価格変動も顕著化することが予想される。2021年の干ばつ時には大豆価格が急騰した。LAC諸国が気候変動に適応し生産能力を維持していくことは、自国の農業だけでなく、世界市場の安定にとっても極めて重要となってくる。肥料に関しては、農産物に対する散布量の伸びは大幅に鈍化するが、施肥量が減少することはない予想される¹²。

LACは世界有数の畜産生産地域でもある。飼料穀物に恵まれているため、集約的生産体制がさらに強化され、同地域の畜産業は高い競争力を維持していくものと予想される。畜産部門の生産増加が進むなか、2033年までに食肉部門が酪農部門よりも市場シェアを伸ばすと予測される。食肉のうち、生産増加の約60%が鶏肉に起因する。牛肉と豚肉はそれぞれ年率0.9%と1.3%

¹² LACでは肥料使用量が過去10年間に27%増加したが、2022年の肥料コストの急上昇とロシアの対ウクライナ戦争に起因するサプライチェーンの分断と相まって、1ヘクタール当たりの施肥量は大幅に減少し、効率的使用が増えたと考えられる。効率向上の影響として今後10年間の1ヘクタール当たりの施肥量の伸びが8%に減速する可能性がある。

の成長が見込まれ、2033 年までに生産される食肉の 19%と 20%を占めると予想される。生産性の向上により、2033 年までに牛群頭数を 2%増やすだけで牛肉の生産量を 9%増加させることができる。しかし、今後の見通しは、これまでのよう家畜の疾病リスクに左右されるところが大きい。飼料に関しては、LAC 地域は世界の飼料使用量の 12%を占めており、飼料として使用されるとうもろこしとプロテインミールがそれぞれ年間 1.4%と 1.1%増加すると予測される。追加的に必要となる飼料使用の 50%がとうもろこし、21%がプロテインミールの生産に起因すると予測される。

LAC の農業部門から発生する温室効果ガス (GHG) 排出量は、今後 10 年間で 3% 増加するが、畜産よりも穀物の生産からの排出量が比較的大きくなると予想される。2033 年には同地域は農業からの世界排出量の 18%を占めるようになると予想される。とはいっても、生産高単位あたりの排出量は、今後 10 年間一貫して減少すると予測される。2033 年までにサプライチェーンにおける食品の損失 (loss) や小売店や消費者レベルでの食品廃棄 (waste) の半減達成 (SDG 目標 12.3) が可能となれば、LAC 地域の総農業排出量をベースライン比で 4.6%削減できる。これは、2030 年までに、農業 GHG 排出量を 2021~23 年の平均基準から 2.6% 削減できることを意味する。

農産物輸出は、LAC 域内の農業部門の成長を牽引する上で極めて重要な役割を果してきた。これからも輸出・生産比率が一貫して増加し、2033 年には同率が 70%を超える、LAC 産農産物の輸出超（黒字）幅が 26%近く拡大する可能性がある。世界の農産品輸出に占めるブラジルのシェアは 2033 年に 19%まで上昇するとの予測もある。ブラジルは同地域の輸出拡大のほぼ半分を占めるが、予測される輸出の伸びは年率 1.8%で過去 10 年間の 7.2%と比べると大幅な鈍化となる見通しだ。LAC の輸出拡大に貢献してきたメキシコとアルゼンチンが注目される。ペルーからの生鮮果実の輸出も急増すると予測される。

LAC 地域は、世界の魚介類生産量の 10%弱を占めており、FAO が予測する年率 0.6%の成長が達成されれば、2033 年にはこの 10%シェアを維持できる見込みである。生産量の 4 分の 3 は依然として捕獲漁業によるものであるが、養殖業の寄与幅が拡大している国も幾つかある。捕獲漁業の生産成長が年率 0.4%であるのに対して、養殖業の伸び率は約 3 倍の 1.2%と予想される。海面水温を上昇させ、魚粉や魚油の生産量を低下させるエルニーニョ現象は、捕獲漁業に断続的かもしれないが影響を与える。また、エルニーニョは、アワビのような高価値の養殖生産

にも影響を及ぼす。気候変動の影響がさらに深刻化すれば、供給の安定性に多大な影響を及ぼし、価格変動につながる可能性がある。

IV. LAC と日本の食料安全保障

以上で考察したように、カリブ地域を除く LAC 諸国は大豆やトウモロコシ、牛肉、鶏肉などの食料資源が豊富で、世界に安定的に食料を供給している。ブラジル、アルゼンチン、メキシコ、チリを中心に農水産物の安定的供給源として日本の食料安全保障にも大きく貢献している。その反面、既に日本が主要な供給先となっているにもかかわらず、日本の食料品市場における認知度がそれほど高くないラテンアメリカ産の商品も少なくない。以下では、日本の食料安全保障における LAC 諸国の重要性について、日本・LAC 貿易統計を駆使して詳しく分析する。

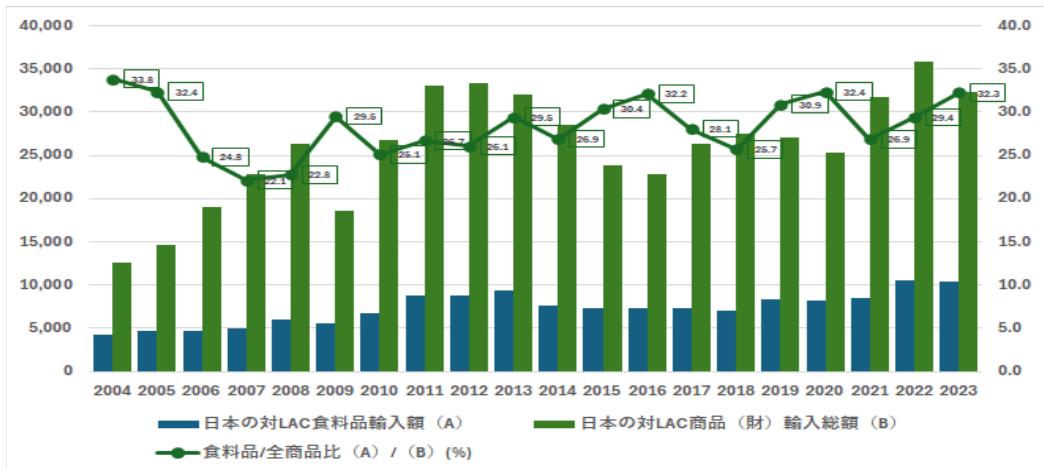
A. 日本の食料品輸入市場における LAC 產品の重要性

日本の LAC 地域からの食料品輸入額¹³（食料貿易の定義とその対象となる品目については脚注 13 を参照）は 2004 年の 42 億 7,000 万ドルから 2023 年の 104 億 4,000 万ドルに増加した。過去 20 年で年率にして 4.8% 伸びたことになる（図-1）。

コモディティブームが続いた 2004～13 年には日本の対 LAC 食料品輸入が順調に伸びた。2014～18 年に世界の農産品価格が下落するなか、日本の対 LAC 食料品輸入も伸び悩む。だが、2019 年から回復基調となり、コロナ禍においても大きく落ち込むことはなかった（図-2）。農産品価格が上昇する 2022 年から日本の LAC からの食料品輸入も回復基調にある。総合的にみると、日本の対 LAC 食料輸入は世界市場における農産品価格と連動していることが分かる。

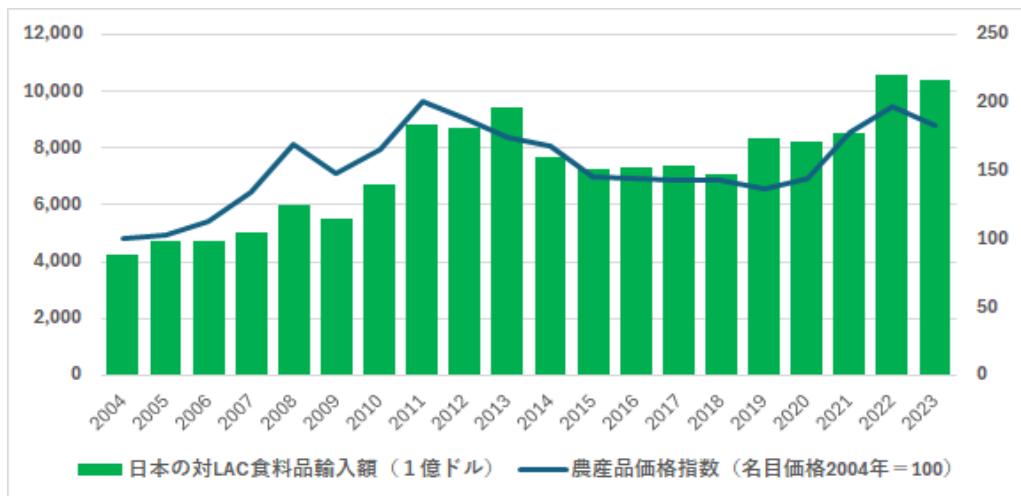
¹³ 本レポートでは、関税分類番号「Harmonized Schedule Code（ハーモナイズド・システム・コード HS）」の 2 桁（類、Chapter）に基づく次の 10 類に属する 23 品目を食料品として定義し、食料貿易の関係を考察する。① 肉類と魚類（動物（HS01）、肉及び食用のくず肉（02）、魚並びに甲殻類、軟体動物）（03）、肉、魚、甲殻類、軟体動物の調製品（16）、② 酪農品、鳥卵（04）、③ 野菜、根及び塊茎（07）、果物、柑橘類（08）、④ 穀物（10）、穀粉、加工穀物（11）、⑤ 採油用の種及び果実（12）、⑥ 糖類及び砂糖菓子（17）、ココア及びその調製品（18）、⑦ 穀物、穀粉、でん粉又はミルクの調製品及びベーカリー製品（19）、野菜、果実、ナットその他植物の部分の調製品（20）、各種の調製食料品（21）、飲料、アルコール及び食酢（22）、⑧ コーヒー、茶、マテ及び香辛料（09）、⑨ 動物性、植物性又は微生物性の油脂及びその分解生産物（15）、⑩ その他：動物性生産品（05）、植物及びりん茎（06）、植物性の液汁及びエキス（13）、その他の植物性生産品（14）、食品工業において生ずる残留物（23）。

図一 1：日本の対 LAC 食料品輸入の推移 主要品目別 2004～23 年
(単位 百万ドル)



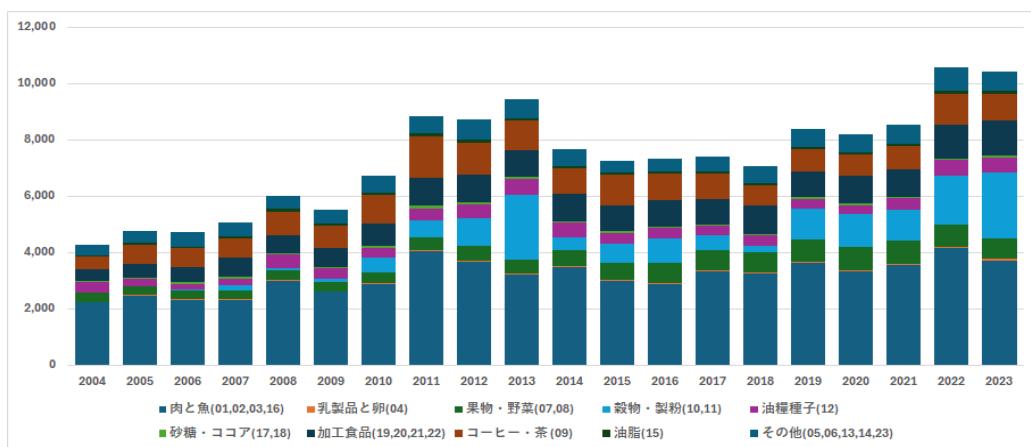
出所：ITC Trade Map より筆者作成。

図一 2：日本の対 LAC 食料品輸入額と農產品価格との連動
(単位：百万ドル、指標 2004 年=100)



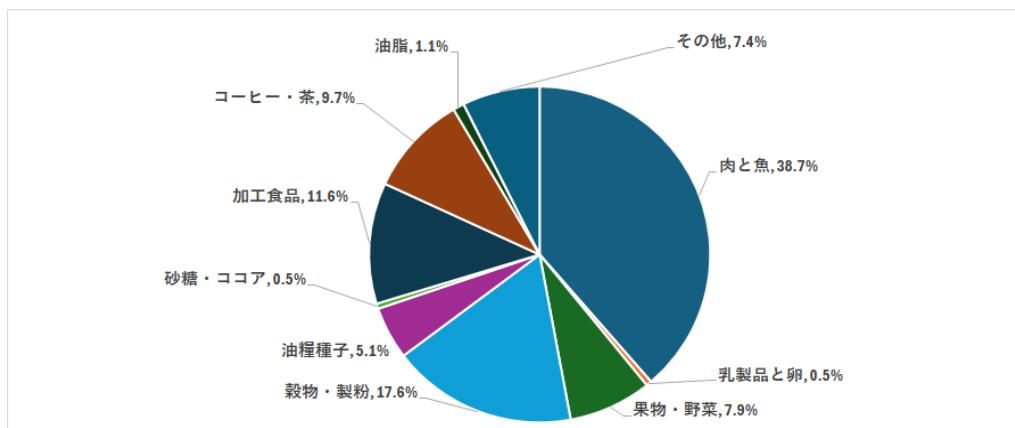
出所：貿易統計：ITC、Trade Map より筆者作成。農產品価格：World Bank, Commodity Market prices, Pink Sheet Data. <https://www.worldbank.org/en/research/commodity-markets> より筆者作成。

図-3：日本の対 LAC 食料品輸入の推移 主要品目別 2004～23 年
(単位 百万 ドル)



出所：ITC Trade Map より筆者作成。

図-4：日本の対 LAC 食料品輸入額の品目別構成 2021～23 年平均
(パーセント)



出所：ITC Trade Map より筆者作成。

日本の世界全体からの食料品輸入額は 2021～23 年平均で 734 億 6,000 万ドルであったが、そのうち LAC 地域からの食料品輸入額は 98 億 3,000 万ドルに達した。日本は金額にして食料品輸入の 13.4%を LAC から調達したことになる。これとは対照的に、日本の商品（財）輸入総額は、世界全体からが 8,217 億ドル、LAC からが 333 億ドルとなっており、LAC の日本の全商品輸入額の占有率は 4.1%に過ぎない。したがって、日本の食料品輸入における LAC 依存度（13.4%）は日本の全商品輸入総額での依存度（4.1%）の 3 倍に近い。よって、食料品に関しては日本の対 LAC 依存度が相対的に高いことが分かる（表－1）。

日本の食料品輸入額の増減率（2004～23 年）を品目類別（HS2 衍、Chapter）にみると、輸入額で 2 番目に大きい「穀物・製粉（HS10、11）」が年率にして 27.8%を記録、特に 2019 年から輸入額が大きく伸びて 2023 年には 23 億ドルを超えた。輸入額で最大の「肉と魚（01,02,03,16）」は、2011 年から現在に至るまで年間で 30～40 億ドル台を維持しているが、過去 20 年の輸入額伸び率は年平均で 2.8%に過ぎない。輸入金額で 3 番目に大きい「加工食品（19,20,21,22）」は年率で 5.9%伸びた。上

記の品目と比べると輸入額は少額だが、油脂（15）、乳製品と卵（04）も 6%台の伸び率を示している（図－3）。

日本の対 LAC 食料品輸入額の構成を直近の 3 年（2021～23 年平均）に限ってみると、肉と魚（HS01、02、03、16）が食料品輸入額の 38.7%を占める。穀物・製粉（10、11）が 17.6%、加工食品（19、20、21、22）が 11.6%、コーヒー・茶（09）が 9.7%、果物・野菜（07、08）（7.9%）が続く。これら 5 品目で、食料品輸入総額の 85.5%を占める（図－4）。

B. 上位 40 品目別

表－3 は、日本が LAC 地域から輸入する食料品の上位 40 品目を号別（HS6 衍、Sub-heading）に分析したものである。2021～23 年平均でみると、日本が LAC 地域から輸入した上位 40 品目の輸入額（88 億 5,000 万ドル）は、日本が世界全体から同 40 品目を輸入した 284 億 1,600 万ドルの 31.1%に相当する。よって、日本はこれら 40 品目の輸入需要の 3 割を LAC から調達していることになる。

表—3：日本の対 LAC 食料品輸入ランキング（上位 40 品目）、HS6 衍、2021～23 年平均
(百万ドル、パーセント)

順位	品目番号 (HS6 衍)	項目品名	日本のLACから の項目品輸入 (A)	日本の世界から の項目品輸入 (B)	LACからの輸入が世界 からの輸入に占める 割合 (A)/(B) (%)
			2021～23年平均		
1	'100590	とうもろこし (播種用のものを除く)	1,708	5,155	33.1
2	'090111	コーヒー (煎ってあるかまたはカフェイン抜きのものを除く)	914	1,411	64.8
3	'020714	鶏肉 (ニワトリ) (分割したもの及びくずのもの、冷凍したものに限る)	889	1,334	66.6
4	'020329	豚肉 (枝肉、半枝肉、ハム、肩肉、カット肉を除く)	642	2,295	28.0
5	'030312	太平洋さけ (紅さけを除く)	600	620	96.9
6	'220710	エチルアルコール (アルコール分が80%以上のものに限る)	532	652	81.5
7	'230400	大豆油かす (粉碎してあるかないか又はペレット状であるかないかを問わない)	395	969	40.8
8	'120190	大豆 (播種用のものを除く)	375	2,294	16.3
9	'030481	太平洋さけのフィレ (冷凍したものに限る)	294	372	79.0
10	'030617	シュリンプ及びブローン (冷凍もの)	229	1,388	16.5
11	'030482	ます (冷凍したものに限る)	224	297	75.4
12	'080390	バナナ (生鮮のもの及び乾燥したものに限る) (プランテインを除く)	187	946	19.8
13	'080440	アボカド (生鮮のもの及び乾燥したものに限る)	177	181	97.8
14	'202319	豚肉 (生鮮のもの及び冷蔵し又は冷凍したものに限る) (骨付きのものを除く)	137	1,897	7.2
15	'220421	ぶどう酒 (2リットル以下の容器入りにしたもの)	126	1,013	12.4
16	'230120	魚又は甲殻類、軟体動物もしくはその他の水棲無脊椎動物の粉、ミール及びペレット	112	262	42.8
17	'071080	冷凍野菜 (調理してないもの及び蒸気又は水煮による調理をしたものに限る)	99	596	16.6
18	'030822	うに (冷凍したもの)	96	98	98.8
19	'020230	牛肉 (骨付でない肉)	93	1,585	5.9
20	'250100	塩 (食卓塩及び変性させた塩を含むもの)	91	332	27.5
21	'210111	コーヒー エキス、エッセンス及び濃縮物	89	205	43.1
22	'030743	イカ (冷凍したもの)	85	545	15.6
23	'200969	ぶどうジュース (ぶどう搾汁を含む) (ブリックス値が30以上のもの)	69	115	60.2
24	'020130	牛肉 (骨付でない肉) (生鮮のもの及び冷蔵したものに限る)	62	1,860	3.3
25	'200911	オレンジジュース (冷凍したもの)	54	84	65.0
26	'160242	豚肉 (肩肉及びこれを分割したもの)	52	495	10.5
27	'120991	野菜の種 (播種用)	49	145	33.7
28	'080610	ぶどう (生鮮のもの)	47	105	44.9
29	'020712	鶏肉 (ガルルス・ドメティクス) のもの。分割しないもの (冷凍したものに限る)	39	41	94.6
30	'220890	エチルアルコール (アルコール分80%未満のもの)及び蒸留酒、リキュールその他のアルコール飲料	39	111	34.8
31	'070920	アスパラガス (生鮮のもの及び冷蔵したものに限る)	38	44	86.8
32	'151590	植物性油脂又は微生物性油脂及びこれらの分別物	38	136	28.0
33	'081190	冷凍果実及び冷凍ナツツ (調理してないもの及び蒸気又は水煮による調理をしたものに限る)	37	190	19.6
34	'070993	かぼちゃ類 (ククルビタ属のもの)	37	71	51.6
35	'030235	くろまぐろ (トゥヌス・ティヌス及びトゥヌス・オリエンタリス)	37	51	71.8
36	'200919	オレンジジュース (生鮮・冷蔵のもの)	35	36	98.8
37	'080550	レモン (キトルス・リモン及びキトルス・リモヌム) 及びライム	35	90	38.8
38	'150420	魚の油脂及びその分別物 (肝油を除く)	34	52	65.6
39	'180100	カカオ豆 (生のもの及び炒ったもので、全形のもの及び割つたものに限る)	28	124	22.4
40	'200290	トマト (調製し又は保存に適する処理をしたもの)	27	219	12.2
上位40品目合計			8,850	28,416	31.1
日本のLACおよび世界からの食料品輸入総額			9,832	73,456	13.4
合計	日本のLACおよび世界からの財輸入総額 (全商品)		33,288	821,728	4.1

注：2023 年値は暫定値。

出所：ITC Trade Map より筆者作成。

LAC 地域からの輸入額でランク付けした上位 10 品目には、①とうもろこし、② コーヒー、③ 鶏肉（冷凍）、④ 豚肉、⑤ 太平洋さけ、⑥ アルコール飲料（アルコール分 80%以上）、⑦ 大豆油かす、⑧ 大豆、⑨ 太平洋さけフィレ（冷凍）、⑩ シュリンプおよびプローン、が含まれる。上位 11～20 品目には、⑪ ます、⑫ バナナ、⑬ アボカド、⑭ 豚肉（骨付きを除く）、⑮ ぶどう酒、⑯ 魚のミールおよびペレット、⑰ 冷凍野菜、⑱ うに（冷凍したもの）、⑲ 牛肉（骨付きでないもの）、⑳ 塩など、表一3 に顔を出す品目もある。

ここで注目に値する点は、品目によっては LAC 地域への依存度が非常に高いことである。例えば、太平洋さけ（銀さけ）、アボカド、うに、オレンジジュース（冷凍を除く）などのように、LAC からの輸入が世界からの輸入に占める割合が 90%を超える品目もある。アルコール飲料（エチルアルコール）、アスパラガス、太平洋さけフィレ（冷凍）においては、LAC からの調達率が 80%に近い。くろまぐろに関しては 70%を超える。金額的にも大きいコーヒーと鶏肉（冷凍）でも LAC からの輸入率は 60%を超える。輸入額で第 1 位のとうもろこし（播種用を除く）では、日本の輸入需要の 33%が LAC 地域から調達されている。

A. 主要供給国別

上記したように、日本が LAC 諸国から輸入する食料品は世界全体からの輸入額の 13.4%に過ぎないが、LAC 諸国が既に日本への主要供給国となっている品目もある。表一4 は、LAC 諸国が日本の食料品輸入（2023 年）累計金額において上位 3 か国にランクインした品目を整理したものである。日本の食卓、外食業、食品産業には欠かせない商品の主要調達先となっていることが分かる（詳しくは附属表一3 を参照）。

B. 値格競争力

日本が LAC から輸入する主要食料品の単価（運賃・保険料込みの c.i.f 価格で関税を含まない）を調達先国別で比較すると、日本市場におけるラテンアメリカ産の穀物の価格優位性は、とうもろこしや大豆で明白である（附属表一4）。例えば、とうもろこしの輸入単価は 2023 年平均で、ブラジル産（2 位）が 443 円/kg、アルゼンチン産（3 位）が 400 円/kg となっており、日本市場で第 1 位の調達先国であるアメリカ合衆国（487 円）、5 位のウクライナ、世界平均（463 円）に比べ安価で輸入されている。ブラジル産大豆の輸入単価（86.02 円/kg）はアメリカ産（96.81 円）、カナダ産（127.06 円）、中国産（175.86 円）、フランス（157.92 円）を大きく下回る。

表—4：日本の食料品輸入額において LAC 諸国が上位 3 か国にランクインする品目
2023 年

ブラジル	鶏肉（1位）、牛の調整品（水煮、3位）、とうもろこし（1位）、とうもろこし（肥料用、2位）、オレンジジュース（1位）、コーヒー生豆（1位）、インスタントコーヒー（2位）、大豆（1位）、大豆油粕（1位）、落花生（調製していないもの3位）、大豆油粕（調製飼料用1位）。
アルゼンチン	馬肉（3位）、とうもろこし（3位）、とうもろこし（肥料用、3位）、レモンジュース（3位）、ぶどうジュース（2位）、いか（もんごうを除く、3位）。
メキシコ	ライム（1位）、すいか（1位）、マンゴー（1位）、アボカド（1位）、フルーツピューレ・ペースト（2位）、グレープフルーツジュース（2位）、オレンジジュース（3位）、ライムジュース（2位）、芽キャベツ（1位）、その他のチコリー（2位）、セルリー（2位）、アスパラガス（1位）、スイートコーン（3位）、かぼちゃ（1位）、菜種（採油用、3位）、いわし（生・燻・凍、1位）。
チリ	牛肉（くず肉、3位）、レモン（2位）、さくらんぼ（2位）、ぶどう（生鮮、1位）、ぶどう（乾燥、3位）、くるみ（2位）、キーワイフルーツ（3位）、フルーツピューレ・ペースト（3位）、ぶどうジュース（1位）、りんごジュース（2位）、クランベリージュース（1位）、きんじゅけ（1位）、うに（1位）、魚油（肝油除く、1位）、魚粉（2位）、寒天（1位）。
ペルー	アボカド（2位）、アスパラガス（3位）、アスパラガス缶詰（2位）、しょうが（生鮮、3位）、いか（もんごうを除く、2位）、いか（調整、2位）、魚粉（3位）。
コロンビア	コーヒー生豆（3位）、バーム油（3位）。
コスタリカ	パイナップル（冷凍、2位）、パイナップルジュース（3位）。
エクアドル	バナナ（2位）、カカオ豆（2位）、ココアペースト（3位）、プロッコリー（1位）。
グアテマラ	プロッコリー（3位）。
ワルグアイ	コーンビーフ（2位）、馬肉（2位）。
ベネズエラ	カカオ豆（3位）。

出所：出所：農林水産省（2024）「農林水産物輸出入概況」輸出・国際局国際経済課、令和6年4月2日、<https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/kokusai/>より筆者作成。

食肉のなかで優位性が高いのはブラジル産の鶏肉である。ブラジルの鶏肉産業は、とうもろこしや大豆かすなど豊富な飼料穀物を背景に、生産から加工、流通に至るまで垂直統合された生産体制下で成長してきた。日本の鶏肉輸入量（調製品を含まない）の 65% を占めており、外食などの業務用や小売店での販売を通して日本の食卓に普及している。輸入単価（2023 年）でみると、ブラジル産（309.7 円/kg）はタイ産（379.0 円）、マレーシア産（490.9 円）と比較すると安価だが、アメリカ産（278.2 円）、ト

ルコ産（270.6 円）と比べると輸入価格が高い。日本のスーパーなどで販売されているブラジル産鶏肉の大半が海外では需要が低いモモ肉となっている。スーパー、コンビニエンスストアやファストフードなどで総菜などに利用されている冷凍のチキンナゲットや冷凍からあげなどの鶏肉調製品の輸入単価を調達先国別でみると、1 位のタイ（輸入単価 688.5 円/kg）、2 位の中国（600.6 円）、3 位のベトナム（780.5 円）、4 位の韓国（612.9 円）と比べると、5 位のブラジル（435.6 円）は安価で日本市場に提供できており、価格競争力は高い。

アルコール飲料（ビール、ぶどう酒、ウイスキー、ブランデーなど）では、フランス、英国、アメリカ合衆国、イタリアに次いでチリが 5 位につける。ぶどう酒に限ってみると、チリはフランス、イタリアに次いで 3 位に位置する。ぶどう酒の輸入単価では、チリ（327 円/L）はフランス（2,678 円）、イタリア（743 円）を大きく下回る。チリワインはコストパフォーマンスが高いと評価される所以である。

日本市場においてラテンアメリカの存在感が高いのがコーヒー生豆である。1 位のブラジル（輸入額の 33.2%）は、2 位のベトナム（16.7%）を大きく引き離す。3 位のコロンビア（12.8%）、4 位にグアテマラ（8.7%）が続く。輸入単価を比較すると、ブラジル産（540 円/kg）は、ベトナム産（341 円）、グアテマラ（811 円）、エチオピア（829 円）と比べるとかなり安価で供給されている。グアテマラ産やエチオピア産は高品質コーヒーとして日本市場でも知られているが、コーヒーの場合、品種や生産地、品質によって消費者の嗜好が異なり、価格競争力のみに支配される市場ではない。

チリは日本のサケ・マス輸入市場の 58.7%（2023 年の金額構成比）を占める最大の供給国である。輸入単価でみると、チ

リ産（1,163 円/kg）は、アメリカ産（779 円）、ロシア産（870 円）に比べると高価だが、輸入金額で第 2 位のノルウェー（2,043 円）の約半額である。チリ産のサケもコストパフォーマンスが高い商品と評価される。エビの輸入額に関しては、1 位インド、2 位ベトナム、3 位インドネシアに次いでアルゼンチンが 4 位につける。輸入単価でみると、アルゼンチン産（1,330 円）は、インド産（1,057 円）と比べると高額だが、インドネシア（1,374 円）やタイ（1,376 円）とは大差なく、ベトナム産（1,570 円）よりも低額で、日本市場でも評価が高まっている商品である。

日本市場で LAC 地域からの調達率が高く、市場が飽和状態に近づいている品目もある一方で、バナナ、豚肉、牛肉、いか（冷凍）、果実や野菜など、さらなる市場開拓が可能な食料品も少なくない。LAC 地域からの調達率が高い商品においても、日本の消費需要が伸びれば、これからも LAC 食料貿易が拡大する可能性がある。LAC 以外の地域からの商品と対抗できる競争力を培う努力を続ける必要がある。

E. LAC 農水産品の日本市場アクセス：関税障壁を中心に

表-5 は、日本の対 LAC 主要農水産品輸入（表-3 に明記される上位 40 品目）の市

場アクセスについて、日本が世界全体に適用する基本関税率、WTO 協定関税率、日本・メキシコ経済連携協定（EPA）、日本・チリ EPA、日本・ペルーEPA、これらラテンアメリカ 3 か国が加盟する「環太平洋パートナーシップに関する包括的及び先進的な協定」(CPTPP) の関税率を 2025 年 1 月の時点で比較分析したものである。

表-5 から読み取れるように、上位 40 品目のなかには、とうもろこし（飼料用を除く）（HS100590）、コーヒー（生豆）（HS090111）、大豆（播種用を除く）（120190）、大豆油かす（230400）のように、基本税、WTO 協定税、二国間 EPA 税、CPTPP 税のいずれにおいても、無税となっている品目が多くある。エチルアルコール（220710）、ぶどう酒（220421）、バナナ（080390）のように、基本税、WTO 協定税は高率だが、EPA では無税、あるいは低率関税となっている品目もある。一方で、特に、肉類（豚、鶏、牛）、ぶどうジュース、オレンジジュース、トマトの調整品など、複雑な関税割当制度の対象となっている品目も少なくない。

二国間 EPA 協定では、関税割当制度¹⁴の対象となっている品目が幾つかある。日墨 EPA では、牛肉および牛肉調製品、豚肉および豚肉調製品、鶏肉および鶏肉調製品、天然はちみつ、生鮮オレンジ、アガベシロップ、トマトピューレー・ペースト（トマト・ケチャップ[°]、トマトソース製造用）、オレンジジュース（濃縮・非濃縮）、無糖トマトジュース、トマト・ケチャップ、その他のトマトソース、ソルビトール、デキストリンなど 13 品目（14 枠）が対象となる。日智 EPA では、冷凍牛肉、牛の冷凍くず肉、豚肉および豚肉調製品、鶏肉、トマトピューレー・ペースト（トマト・ケチャップ、トマトソース製造用）のチリ 5 品目（5 枠）に対して関税割当制度が適用される。日秘 EPA では、とうもろこし（菓子用・飲料用）、豚肉、鶏肉及び鶏肉調製品、トマト・ケチャップなど 5 品目（6 枠）に対して関税割当制度が適用される。CPTPP 協定では、対象国によって異なるが、地域全体で 35 品目（38 枠）が設けられている。チリ産のイヌリンも含まれる（農林水産省 2023）。二国間 EPA に含まれる市場アクセス条件が CPTPP のそれよりも有利となる可能性も

¹⁴ 経済連携（EPA）協定に基づく関税割当制度とは、締約相手国に対して一定の輸入数量（関税割当数量）に限り、一般税率よりも低い特惠税率（枠内税率）を適用する一方、この一定の輸入数量を超える輸入分については、原則として、一般税率（枠外税率）を適用する仕組み。

表－5：日本の対 LAC 食料品輸入に適用される関税、上位 40 品目別
(2025 年 1 月 1 日現在)

順位	項目番号 (HS6桁)	項目品名	関税率		関税率（経済連携協定別）			
			基本（General）	WTO協定（WTO）	メキシコ	チリ	ペルー	CPTPP
1	'100590	とうもろこし（播種用のものを除く）	無税	無税	無税	無税	無税	無税
2	'090111	コーヒー（カフェインを除いてないもの）	無税	無税	無税	無税	無税	無税
3	'020714	鶏肉（ニワトリ）（分割したもの及びくずのもの、冷凍したものに限る）	骨付き（20%）、その他（12%）	骨付き（8.5%）、その他（11.9%）	骨付き・関税割当数量以内（5.1%）その他・関税割当数量以内（7.1%）	その他・関税割当数量以内（8.5%）	骨付き・関税割当数量以内（6.8%）その他・関税割当数量以内（8.5%）	骨付き（3%）、その他（無税）
4	'020329	豚肉（骨付きのものも及び肩肉並びにこれらを分割したもの（枝肉、半枝肉、ハム、肩肉、カット肉を除く）	5%	(482円/kg)	税割当数量以内のもの（535.53円/kg:課税価格/kg又は482円/kgのうちいずれか低い税率）	関税割当数量以内のもの（535.53円/kg:課税価格/kg又は482円/kgのうちいずれか低い税率）	関税割当数量以内のもの（524円×1.007-課税価格）/kg又は62円/kgのうちいずれか低い税率	(524円×1.007-課税価格)/kg又は62円/kgのうちいずれか低い税率
5	'030312	太平洋さけ（紅さけを除く）	5%	3.5%		ぎんざけ無税		ぎんざけ1.2%
6	'220710	エチルアルコール（変性させてないものでアルコール分が90%以上のものに限る）		27.2%	無税	無税	無税	無税
7	'230400	大豆油かす（粉砕してあるかないか又はペレット状であるかないかを問わない）	無税	無税	無税	無税	無税	無税
8	'120190	大豆（播種用のものを除く）	無税	無税	無税	無税	無税	無税
9	'030481	太平洋さけのフィレ（冷凍したものに限る）	5%	3.5%	無税	無税	2%	無税
10	'030617	ショウブ及びブローン（冷凍もの）	4.1%	1%	無税	無税	無税	無税
11	'030482	ます（冷凍したものに限る）	5%	3.5%	無税	無税	2%	無税
12	'080390	バナナ（生鮮のものに限る）毎年4月1日から同年9月30日までに輸入されるもの（毎年10月1日から翌年3月31日までに輸入されるもの）	40%(50%)	20%(25%)	無税		無税	7.2%(9%)
13	'080440	アボカド（生鮮のもの及び乾燥したものに限る）	無税	無税	無税	無税	無税	無税
14	'020319	豚肉（生鮮のもの及び冷蔵し又は冷凍したものに限る）（骨付きのものを除く）	5%	(482円/kg)	関税割当数量以内のもの（535.53円/kg:課税価格/kg又は482円/kgのうちいずれか低い税率）	関税割当数量以内のもの（535.53円/kg:課税価格/kg又は482円/kgのうちいずれか低い税率）	(524円×1.007-課税価格)/kg又は62円/kgのうちいずれか低い税率	(524円×1.007-課税価格)/kg又は62円/kgのうちいずれか低い税率
15	'220421	ぶどう酒（2リットル以下の容器入りにしたもの）	21.3%又は156.80円/kgのうちいずれか低い税率ただしその税率が93円/kgを下回る場合は93円/kg	15%又は125円/kgのうちいずれか低い税率ただしその税率が67円/kgを下回る場合は67円/kg	無税	無税	無税	1.4%又は125円/kgのうちいずれか低い税率
16	'230120	魚又は甲殻類、軟体動物もしくはその他の水棲無脊椎動物の粉、ミール及びペレット	無税	無税	無税	無税	無税	無税
17	'071080	冷凍野菜（調理していないもの及び蒸気又は水煮による調理をしたものに限る）	ごぼう（20%）、スイートコーンを主成分とするもの（12.5%）	ごぼう（12%）、スイートコーンを主成分とするもの（10.6%）	無税	無税	無税	無税
18	'030822	うに（冷凍したもの）	10%	7%		無税	無税	無税
19	'020230	牛肉（冷凍、骨付きでない肉）	50%	50%	関税割当数量以内30.8%	関税割当数量以内30.8%		22.5%
20	'250100	塩（塩及び純塩化ナトリウム）	0.5円/kg		無税			0.18円/kg
21	'210111	コーヒー エキス、エッセンス及び濃縮物（インスタンココーヒー）	12.3%	8.8%	無税	無税	無税	無税
22	'030743	イカ（冷凍したもの）もんごいか（するめいか）		3.5%（5%）	無税		無税（アメリカおおかいか）（全形のもの及び断片状のもので、1個の重量が1キログラム以上のものに限る）	無税(1.8%)

表-5 続く

順位	項目番号 (HS6桁)	項目品名	関税率		関税率（経済連携協定別）			
			基本 (General)	WTO協定 (WTO)	メキシコ	チリ	ペルー	CPTPP
23	'200969	ぶどうジュース（ぶどう搾汁を含む）	しょ糖の含有量が全重量の10%以下のもの (27%)、その他 (35%又は27円/kgのうちいずれか高い税率) 27円/kgのうちいずれか高い税率	しょ糖の含有量が全重量の10%以下のもの (23%)、その他 (29.8%又は23円/kgのうちいずれか高い税率)	しょ糖の含有量が全重量の10%以下のもの (23%)、その他 (29.8%又は23円/kgのうちいずれか高い税率)	無税	しょ糖の含有量が全重量の10%以下のもの (2.9%)、その他 (3.7%又は2.88円/kgのうちいずれか高い税率)	その他 (10.8%又は8.36円/kgのうちいずれか高い税率)
24	'020130	牛肉（骨付きでない肉）（生鮮のもの及び冷蔵したものに限る）	50%	50%	関税割当数量以内 30.8%			22.5%
25	'200911	オレンジジュース（冷凍したもの）	しょ糖の含有量が全重量の10%以下のもの (30%)、その他 (35%又は27円/kgのうちいずれか高い税率)	しょ糖の含有量が全重量の10%以下のもの (25.5%)、その他 (29.8%又は23円/kgのうちいずれか高い税率)	関税割当数量以内 (6.3%)、その他 (7.4%又は5.7円/kgのうちいずれか高い税率)		関税割当数量以内 (9.2%)、その他 (10.8%又は8.36円/kgのうちいずれか高い税率)	
26	'160242	豚肉（肩肉及びこれを分割したもの）課税価格が1キログラムにつき、豚肉加工品に係る分岐点価格以下のもの		(1,035円/kg)	関税割当数量以内のもの (577.15円/kg: 課税価格/kg×0.6)又は4.3%のうちいずれか高い税率	関税割当数量以内のもの (577.15円/kg: 課税価格/kg×0.6)又は4.3%のうちいずれか高い税率		(課税価格×(1.014-102.91/897.59)+102.91円)-課税価格)/kg
27	'120991	野菜の種（播種用）	無税	無税	無税	無税	無税	無税
28	'080610	ぶどう（生鮮のもの）毎年3月1日から同年10月31までに輸入されるもの（毎年11月1日から翌年2月末日までに輸入されるもの）	20% (13%)	17% (7.8%)	毎年4月1日から同年7月31日までに輸入されるもの 無税	無税	2.1% (無税)	無税
29	'020712	鶏肉（ガルルス・ドメスティクス）のもの。分割しないもの（冷凍したものに限る）	14%	11.9%	関税割当数量以内のもの 7.1%		関税割当数量以内のもの 10.7%	4.3%
30	'220890	エチルアルコール（変性させてないものでアルコール分が80%未満のものに限る。及び蒸留酒、リキュールその他のアルコール飲料	無税	無税	無税。テキーラ、メスカル及びソートル無税	無税	無税	無税
31	'070920	アスパラガス（生鮮のもの及び冷蔵したものに限る）	5%	3%	無税	無税	無税	無税
32	'151590	植物性油脂又は微生物性油脂及びこれらの分別物（化学的な変性加工をしてないものに限るものとし、精製してあるかないかを問わない）	無税	無税	無税	無税	無税	無税
33	'081190	パイナップル（ベリー）	28% (16%)	23.8% (9.6%)		(無税)	無税	8.6% (無税)
34	'070993	かぼちゃ類（トクルビタ属のもの）	5%	3%	無税	無税	無税	無税
35	030235	くろまぐろ（トウヌス・ティヌス及びトウヌス・オリエンタリス）	5%	3.5%				
36	'200919	オレンジジュース（生鮮・冷蔵のもの）	しょ糖の含有量が全重量の10%以下のもの (30%)、その他 (35%又は27円/kgのうちいずれか高い税率)	しょ糖の含有量が全重量の10%以下のもの (25.5%)、その他 (29.8%又は23円/kgのうちいずれか高い税率)	しょ糖の含有量が全重量の10%以下のもの (6.3%)、その他 (7.4%又は5.7円/kgのうちいずれか高い税率)	しょ糖の含有量が全重量の10%以下のもの (3.2%)、その他 (3.7%又は2.88円/kgのうちいずれか高い税率)	しょ糖の含有量が全重量の10%以下のもの (9.2%)、その他 (10.8%又は8.36円/kgのうちいずれか高い税率)	
37	'080550	レモン（キトルス・リモン及びキトルス・リモヌム）及びライム（生鮮のもの及び乾燥したものに限る）	無税	無税	無税	無税	無税	無税
38	'150420	魚の油脂及びその分別物（肝油を除く）（化学的な変性加工をしてないものに限るものとし、精製してあるかないかを問わない）	10%又は6円/kgのうちいずれか高い税率	7%又は4.20円/kgのうちいずれか高い税率	無税	無税	無税	無税
39	'180100	カカオ豆（生のもの及び炒ったもので、全形のもの及び割ったものに限る）	無税	無税	無税	無税	無税	無税
40	'200290	トマト、調製し又は保存に適する処理をしたもの（食酢又は酢酸により調製し又は保存に適する処理をしたものを除く）	砂糖を加えたもの (22.4%)	砂糖を加えたもの (13.4%)	無税。トマトケチャップその他のトマトソースの製造に使用するもので、関税割当数量以内 (無税)	無税、トマトケチャップその他のトマトソースの製造に使用するもので、関税割当数量以内 (無税)	無税	無税

注：基本税率：事情に変更がない限り、長期間適用される税率。WTO協定率：WTO協定に基づき、品目毎に一定税率を超える税率を課さないことを約束（譲許）している税率。経済連携協定（EPA）税率：特定の国や地域との間で約束された経済連携協定（同表には、日墨EPA、日智EPA、日秘EPA、CPTPPが含まれる）の税率。

出所：財務省、税関、実行関税率表（2024年4月1日版）より筆者作成。

https://www.customs.go.jp/tariff/2025_01_01/index.htm

ある。商品によって EPA を使い分けることが必要となる。

2005 年 4 月に発効した日墨 EPA においては、2007 年の「市場アクセスの条件の改善に関する議定書」をもとに、これまで農産品の市場アクセスが改善されてきた。牛肉・豚肉・鶏肉・オレンジ・オレンジジュースに関しては、2012 年～16 年には関税割当数量の拡大・枠内税率の削減が実施された。日智 EPA（2007 年 9 月発効）においては、ほぼ全ての鉱工業品につき 10 年以内に関税撤廃となつたが、農林水産品では、銀さけ・ます（10 年間での段階的関税撤廃）、ボトルワイン（12 年間での段階的関税撤廃）、そして、牛肉、豚肉、鶏肉等についての関税割当の設定が合意された。日秘 EPA（2012 年 3 月発効）の締結により、ペルー産の鶏肉・鶏肉調製品、アスパラガス、とうもろこし（菓子用・飲料用）等の市場アクセスが改善された（農林水産省 2023）。LAC 諸国の対日本食料品輸出の拡大が可能なのかどうか、日本側のさらなる農産品自由化にも掛かってくる。

V. EU・メルコスール新合意と懸案の日本・メルコスール EPA

2024 年 12 月 5～6 日にウルグアイの首都モンテビデオ市で開催された第 65 回メルコスール首脳会議において、欧州

委員会（European Commission）とメルコスール加盟国は、両地域間の自由貿易協定（FTA）について最終的な合意に達したと発表した。EU・メルコスール FTA は 2019 年に政治合意されたものの、持続可能性に関する事項や EU の農業部門の反発などにより、その後停滞していた。今回の最終合意に至った背景には、EU の自動車や繊維産業などからの早期締結を求める声に加え、世界で保護貿易主義的な圧力が高まるなか、EU が保護貿易主義を拒絶していく姿勢を鮮明に打ち出す狙いなどがある（European Commission 2024）。

今回の合意によって、メルコスールの対外アジェンダが再び活性化し、「欧州自由貿易連合」（EFTA）、カナダ、アラブ首長国連邦、韓国との交渉が促進されると同時に、「太平洋同盟」とのルール収束プロセスに拍車がかかる可能性も出てくる（Bartesaghi 2024）。メルコスールは 2023 年 12 月にシンガポールとの FTA を締結した。メルコスール加盟国の中には、日本をはじめ、インドネシア、マレーシア、ベトナムなどとも同様の協定を期待する国もある（Japan Times 2024）。今回合意された EU・メルコスール協定の概要を考察することは、現在、懸案となっている日本・メルコスール EPA へのインプ

リケーションを考えるうえで重要なとなるであろう。

A. EU・メルコスール FTA の新合意

欧州委員会は、EUとメルコスールの新協定は持続可能性という点からして画期的な協定と高く評価する。同協定は、貿易と持続可能な開発に関する最新のEU基準を反映したものであり、EU・チリ協定や「EU・カナダ包括的経済貿易協定（CETA）」において合意された基準を超える協定としている。2019年に合意された交渉文書に加え、締約国的一方がパリ協定に重大な違反を犯したり、パリ協定から離脱することを決めたりした場合には、協定を一時停止することができるようになる。また、パリ協定の下での「国が決める貢献（Nationally Determined Contributions）」に沿って、2030年以降の森林減少を止めるための具体的な公約を提示することになる。また、「グローバ

ル・ゲートウェイ構想」¹⁵の一環として、メルコスール諸国における公正なグリーンおよびデジタル移行に向けた18億ユーロのEU支援基金にコミットすることになった。さらに新協定には、公共調達、輸出関税、自動車に関する新たな条項が盛り込まれている（European Commission 2024）。

2024年12月に合意されたEU・メルコスールFTAには2019年の交渉文書には含まれていなかった新しい要素が幾つかある。工業品に関してメルコスールは、自動車（現在の関税率は35%）、自動車部品、機械（最大18%）、化学品、医薬品（最大14%）など、EUの輸出品の90%以上の関税を段階的に撤廃する。また、衣料品や履物（革靴）への市場アクセスも容易になる。電気自動車とハイブリッド車の場合、18年間かけて段階的に自由化される。発効即時に35%から25%に引下げられる¹⁶（Reuters 2024）。

¹⁵ ウクライナ情勢やペニディングとなっていたEU・メルコスールFTAの締結といった課題はあったが、2023年7月のEU・CELACサミットでは、両地域間の協力関係を再確認し、2年ごとの同サミット開催について合意、欧州委員会委員長は「グローバル・ゲートウェイ投資アジェンダ（GGIA）」を発表した。

¹⁶ 2019年の政治合意を詳しくみると、工業製品においては、EUはほぼ100%、メルコスールは90%を自由化することを約束している。EU側はメルコスールからEUに輸出される工業製品の85%について、関税を即時完全撤廃する。一方、メルコスールは、自動車や機械などのセンシティブな工業品については、最大15年かけて漸次的に自由化する。特に自動車（現在の関税35%）、自動車部品（14～18%）、機械（14～20%）、化学薬品（最大18%）、医薬品（最大14%）、衣類および履物（35%）、ニット生地（26%）が高い対外共通関税で保護されている。2019年の合意によって中間財と資本財の関税引き下げによって、グローバル・バリューチェーン（GVC）関連の取引が促進されると期待された。農産品に関しては、EUは

農業に関しては、EU は メルコスールの 農産物輸入の 82% を自由化するのに対し、 メルコスールは EU の輸出品に対する関 税の 93% を撤廃する。一部の商品には 関税割当が適用される。EU は、関税率 7.5% で 9 万 9,000 トンの牛肉割当を 5 年間で 段階的に導入する予定であり、これは EU の年間牛肉消費量の 1.6% に相当する。 EU はすでに年間約 20 万トンの牛肉をメ ルコスールから輸入している。鶏肉には EU の総消費量の約 1.4% に対して割当関 税¹⁷が適用されている。メルコスール 4 か国は鶏肉については既に EU への主要 供給国となっており、ブラジルがウクラ イナを抑えて 1 位となっている。また、 豚肉、砂糖¹⁸、エタノール、米、蜂蜜、と うもろこし、スイートコーンにも欧州圏 からの割当制度がある (Reuters 2024)。

一方で、メルコスールは EU に対し、 チーズ (現在の関税は 16~28%) 3 万ト

ンの無税割当を与え、10 年間かけて段階 的に実施する。粉ミルクと乳児用調製粉 乳の割当枠を設ける。また、メルコスール は、欧州圏からのワイン (現在の 20~35%)、農産物の蒸留によるアルコール度 数の高い蒸留酒 (ほとんどが 20%)、オリーブオイル、生鮮果物、桃とトマトの缶詰、 豚肉製品、チョコレート、清涼飲料水、の 関税引き下げを段階的に実施する。さら に、今回の合意では、パルミジャーノ・レ ッジャーノ・チーズなど特定の EU 伝統 食品の模倣などの特定の EU 伝統食品の 模倣を防ぐため、350 の地理的表示を認 めている (Reuters 2024)。

欧州委員会は農業部門のメリットとし て、① メルコスール向けの輸出手続きの 簡素化、② オリーブオイル、ワイン、チ ョコレート、飲料などの EU 製品の関税 撤廃や一部の乳製品 (チーズ 3 万トン・ 粉乳 1 万トンなど) の無税枠設定による

メルコスールから輸入される商品の 99% (分類表品目数) を自由化するが、そのうち、81.7% が関税撤廃 の対象となり、残り 17.3% がクオータか特恵関税の形で関税軽減される予定であった。自由化から除外さ れたのはわずか 100 品目ほどであった (桑山 2019)。

¹⁷ 肉類に対する関税割当制については、畜産業振興機構 (2024) が詳しい。例えば、牛肉の枠内税率は 7.5% となり、牛肉の割当数量は、発効年 (16,500 トン)、1 年後 (33,000 トン)、2 年後 (49,500 トン)、3 年後 (66,000 トン)、4 年後 (82,500 トン)、5 年後以降 (99,000 トン) へと段階的に拡大される。この割当数量が冷蔵と冷凍の牛肉に分配される。豚肉については、1 トン当たり 82 ユーロが課税される。割当数量は 発効年の 4,167 トンから 5 年後以降に 25,000 トンまで拡大される。鶏肉には枠内で関税が撤廃される。輸 入枠は、発効年 (30,000 トン) から 5 年後以降 (180,000) まで割当数量が拡大する。鶏肉の枠は、「骨なし」と「骨付き」の間で当分に分配される (畜産業振興機構 2024)。

¹⁸ 砂糖については、ブラジル産粗糖に対して現行の低関税の割当数量の範囲内で、無税の割当枠 18 万 トンを設ける。また、パラグアイに 1 万トンの無税枠を設定する (畜産業振興機構 2024)。

輸出拡大の可能性、③ EU で保護される地理的表示 (GI) がメルコスールでも保護されることによるメルコスール市場での模倣品流通の防止、を挙げている (Reuters 2024)。

欧州の農家は、両地域間で合意されたFTAはEUの環境基準や食品安全基準を満たさない南米産農産物を安価に輸入することにつながる、と繰り返し抗議している。欧州委員会は、EUの規則が緩和されることはないとしている。また、起こりうる市場の混乱に対処するためのセーフガード措置も考えられる (Reuters 2024, 畜産業振興機構 2024)。

EUの乳製品の関連団体は今回のFTA合意に歓迎の意を表明している。関税の削減と撤廃に加えて、市場アクセスの非関税障壁の解決に役立つことを期待するとして、協定の迅速な締結と実施を呼びかけた。一方で、欧州農業組織委員会・欧州農業協同組合委員会などの農業生産者団体は、EUの生産者はメルコスールからの農産品はEU域内で求められるアニマルウェルフェアや持続可能性の基準や労働・安全基準を満たしておらず、低コストでの生産が可能となっており、EUの生産者は不公平な競争を強いられると激しく非難している (畜産業振興機構 2024)。今

後はEU理事会と欧州議会、各加盟国で同協定発効に向けた議論が交わされることになるが、農業国であるフランスやポーランドなどが現時点で反対の立場を示すなど手続きの難航を予想する声もあり、議論の動向が注目される。

B. 日本・メルコスール EPA 交渉への含意

日本経団連、日伯経済委員会、ブラジル全国工業連盟、伯日経済委員会、日本商工会議所および日亜経済委員会などの民間団体は、発足メンバーのアルゼンチン、ブラジル、パラグアイ、ウルグアイの4か国、ボリビア（2023年12月に公式加盟が承認）、ベネズエラ（加盟資格停止中）で構成されるメルコスールとのEPAの締結を求めている。メルコスール内では、パラグアイやウルグアイのように日本との経済連携協定(EPA)締結に向けた交渉に対して積極的な国もある。メルコスールとの経済関係緊密化のための対話はこれまで数回行われているものの、EPA交渉はいまだ開始されていない (JETRO 2024a, 2024b, 2019)。

日本のメルコスール諸国との貿易関係は、工業品輸出対農産物輸入という意味においてはEUのそれと似ている側面が

多い。日本とメルコスールとの貿易では、日本は自動車などの工業品を輸出する一方、農産物、鉱物等の原材料などを輸入している。EPA 締結により、自動車や自動車部品などは関税が引き下げられて、輸出環境が改善する可能性がある。その反面、メルコスール加盟国は、大豆、とうもろこし、コーヒー、牛肉、鶏肉などの主要な食料生産国であり、品目によっては輸入関税の引き下げは日本の農家に影響を与える可能性があるため、交渉のネックとなる可能性がある。メルコスール諸国から食料品が大量に安価で調達されれば、日本の食料自給率がさらに低下することも懸念される。日本からの自動車などの工業品とメルコスールからの農産品の市場アクセスとの折り合いが交渉の流れを決めかねない。

第 IV 節で考察したように、メキシコ、チリ、ペルーとの経済連携協定 (EPA) およびこれらラテンアメリカ 3 か国が加盟する CPTPP に基づく関税割当制度にお

いては、締約相手国に対して一定の輸入数量（関税割当数量）に限り、一般税率よりも低い特惠税率（枠内税率）が適用される一方で、この一定の輸入数量を超える輸入分については、原則として、一般税率（枠外税率）が適用される。メキシコに対して 13 品目、チリには 5 品目、ペルーには 5 品目に関税割当制度が適用されている。また、輸入品の価格に応じて課される従価税、輸入品の数量等に応じて課される従量税の加えて、この 2 つを組み合わせた複合税や選択税、輸入される時期に応じて適用される税率が変わる季節関税等が存在する。品目によっては、高い従価税や従量税が課せられる¹⁹。メルコスール諸国にとっては日本がこれまで締結してきた特惠関税に等しいか、それを超える実行関税率を確保できるかがカギとなる。

日本・メルコスール EPA が双方にもたらす恩恵は極めて大きい。日本は、鉱物資源および飼料・食料のより安定的な確保

¹⁹ 2023 年 4 月の時点では、世界から輸入される大豆、コーヒー（生豆）、菜種、トウモロコシ（飼料用のもので、税關の監督の下で飼料の原料として使用するものに限る）のように、日本の実行税率が無税となっている品目もある。一方で、①トウモロコシ（コーンスターク用等）、②米、③小麦・大麦、④豆類（えんどう、小豆、いんげん豆、そら豆等）、⑤落花生、⑥ばれいしょでん粉等、⑦こんにゃく芋、⑧バター、⑨脱脂粉乳、⑩ナチュラルチーズ（プロセスチーズ原料用）などの品目は、関税割当制度の対象となっている。その他に、粗糖・精製糖、緑茶、生鮮野菜、冷凍野菜、トマトジュース（無糖）、トマト・ケチャップ、みかん（生鮮）オレンジ（生鮮）、オレンジジュース、りんご（生鮮）、りんごジュース、食肉、魚介類などに対しては、従量税や従価税が適用される（農林水産省 2023）。

が期待できる。メルコスール諸国にとつては、一次産品等の日本市場へのアクセスがより容易になるだけでなく、日本を起点にアジア市場への展開の可能性が開ける。EPAの締結は、政権交代があつたとしても、経済外交政策の逆戻りを抑制する「ラチェット効果」をもたらす。ビジネス環境の改善および貿易投資関係の深化・拡大は、人の交流のさらなる活性化ならびに日本とメルコスール双方の産業の

一層の発展と協力の原動力となり得るものと考えられる。世界で保護主義が強まるなか、これまで CPTPP プロセスを主導してきた日本にとり、「開かれた自由なアジア太平洋」構想をメルコスール地域にも拡張していくことが重要となるが、はたしてそれが可能なのかどうか、農産物に関する日本の柔軟な交渉姿勢にかかると考えられる。

参考文献

英語・西語文献

- Bartesaghi, Ignacio (2024), “Acuerdo Mercosur - Unión Europea: un camino de cautela y oportunidad”, Forbes Uruguay, el 11 de diciembre.
<https://www.forbesuruguay.com/columnistas/acuerdo-mercosur-union-europea-camino-cautela-oportunidad-n64174>
- IADB (Inter-American Development Bank)(2024), “BID aportará hasta US\$25.000 millones como parte de la Alianza Global contra el Hambre y la Pobreza” Noviembre 15.
https://www.iadb.org/es/noticias/bid-aportara-hasta-us25000-millones-como-parte-de-la-alianza-global-contra-el-hambre-y-la?utm_source=Email&utm_medium=Newsletter&utm_campaign=&utm_term=VPS/DCC
- ECLAC (Economic Commission for Latin America and the Caribbean) *Perspectivas del Comercio Internacional de América Latina y el Caribe, 2024* (LC/PUB.2024/16-P), Santiago.
- (ECLAC/FAO/IICA) (Economic Commission for Latin America and the Caribbean/Food and Agriculture Organization of the United Nations/Inter-American Institute for Cooperation on Agriculture) (2023), *The Outlook for Agriculture and Rural Development in the Americas: A Perspective on Latin America and the Caribbean 2023-2024* (LC/TS.2023/161), San José, 2023.
- European Commission (2024), “Questions and answers on the EU-Mercosur partnership

agreement”, December 6, Brussels.

https://ec.europa.eu/commission/presscorner/detail/en/qanda_24_6245

FAO (2024a), *Report on the way forward to supplying adequate and nutritious food for all while contributing to poverty reduction and rural development—A report prepared for the G20 Task Force for the Establishment of a Global Alliance Against Hunger and Poverty*. Rome.
<https://doi.org/10.4060/cd1666en>.

_____(2024b), *Food Outlook – Biannual report on global food markets. Food Outlook*, June 2024. Rome. <https://doi.org/10.4060/cd1158en>

FAO, UNICEF and WFP (2024), *Report on the way forward to resilience: Preventing hunger and poverty from rising as a result of different shocks – A report prepared for the G20 Task Force for the Establishment of a Global Alliance Against Hunger and Poverty*. Rome.
<https://doi.org/10.4060/cd1667en>.

FAO, IFAD, PAHO, UNICEF & WFP (2023), Latin America and the Caribbean – Regional Overview of Food Security and Nutrition2023: Statistics and trends. Santiago.
<https://doi.org/10.4060/cc8514en>

Granados, Jaime (2024), “El papel de América Latina en la seguridad alimentaria global: Comercio, inversiones y transformaciones sostenibles”, July 15.
<https://blogs.iadb.org/integracion-comercio/es/el-papel-de-america-latina-en-la-seguridad-alimentaria-global-comercio-inversiones-y-transformaciones-sostenibles/>

Granados, Jaime and Fabrizio Operetti (2023), “Comercio para alimentar el mundo, una agenda estratégica para América Latina y el Caribe”, October 16.
<https://blogs.iadb.org/integracion-comercio/es/comercio-para-alimentar-el-mundo-una-agenda-estrategica-para-america-latina-y-el-caribe/>

G20 (Government of Brazil) (2024), *Global Alliance against Hunger and Poverty: Foundational Documents*, for the G20 meetings, G20 Brasil 2024, Building a Just World and a Sustainable Plant.

(IFPRI) (International Food Policy Research Institute) (2024), *2024 Global Food Policy Report: Food Systems for Healthy Diets and Nutrition*. Washington, DC: International Food Policy Research Institute. <https://hdl.handle.net/10568/141760>

Japan Times (2024), “Mercosur ‘ready’ to resume FTA talks with Japan, Paraguay foreign minister says”, Mar 13.
<https://www.japantimes.co.jp/business/2024/03/13/economy/paraguay-foreign-minister-japan-trade-agreement/>

OECD/FAO (2024), OECD-FAO Agricultural Outlook 2024-2033, Paris and Rome,
<https://doi.org/10.1787/4c5d2cfb-en>.

Reuters (2024) “What's in the newly finalised EU-Mercosur trade accord?”, December 7.

<https://www.reuters.com/world/europe/whats-newly-finalised-eu-mercosur-trade-accord-2024-12-06>

World Bank (2024), “Trends and Policy Options to Effectively Fight Global Poverty and Hunger: A report prepared for the G20 Task Force for the Establishment of a Global Alliance against Hunger and Poverty”, Washington D.C.

OECD/FAO (2024) 「OECD-FAO 農業見通し 2024-2033 エグゼクティブ・サマリー」

UNCTAD (United Nations Conference on Trade and Development) (2024) *Trade in processed food*, UNCTAD/STAT/2023/4 and Corr.1

日本語文献

桑山 幹夫 (2019) 「日本・メルコスール間の EPA 交渉にも影響する EU・メルコスール FTA の暫定合意」、『ラテンアメリカ・カリブ研究所レポート』ラテンアメリカ協会、8月 15 日。

JETRO (2024a) 「欧州産業界、EU・メルコスール FTA 交渉合意を歓迎、農業部門は強く反発」ビジネス短信、12月 13 日。

<https://www.jetro.go.jp/biznews/2024/12/5119ae7a1eb39391.html>

____ (2024b) 「EU・メルコスール FTA 交渉が合意」ビジネス短信、12月 10 日。

<https://www.jetro.go.jp/biznews/2024/12/78e36a64a89939b2.html>

____ (2019) 「EU・メルコスール FTA の政治合意、欧州産業界から支持相次ぐ」、ビジネス短信、7月 1 日。<https://www.jetro.go.jp/biznews/2019/07/89fe8e88f5fee666.html>

日本経済新聞 (2024) 「南米、農産物品 対中輸出増へ 米中貿易戦争『漁夫の利』狙う」、12月 19 日。

農畜産業振興機構 (2024) 「EU とメルコスール間の FTA が最終合意、市場拡大に期待も生産者団体は反発 (EU)」12月 11 日。

https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003983.html

農畜産業振興機構 (2019) 「EU・メルコスール (Mercosur) 貿易協定交渉、政治合意」7月 3 日。https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_002474.html

農林水産省 (2024) 「農林水産物輸出入概況 2023 年令和 5 月」令和 6 年 4 月 2 日。
<https://www.maff.go.jp/i/tokei/kouhyou/kokusai/>

農林水産省 (2023) 「我が国の農林水産物の関税制度について」輸出・国際局国際経済課、4月、パワーポイン

附属表—1：主要品目別生産量上位10か国ランキング 2022年
(単位 1000トン、パーセント)

A. 小麦

上位10	生産国	生産量(1000トン)	世界生産に占める割合(%)
1	中国	137,720	17.0
2	インド	107,742	13.3
3	ロシア	104,234	12.9
4	アメリカ合衆国	44,902	5.6
5	オーストラリア	36,237	4.5
6	フランス	34,632	4.3
7	カナダ	34,335	4.2
8	バキスタン	26,209	3.2
9	ドイツ	22,587	2.8
10	アルゼンチン	22,150	2.7
その他		237,692	29.4
世界全体		808,442	100.0

B. とうもろこし

上位10	生産国	生産量(1000トン)	世界生産に占める割合(%)
1	アメリカ合衆国	348,751	30.0
2	中国	277,203	23.8
3	ブラジル	109,421	9.4
4	アルゼンチン	59,037	5.1
5	インド	33,730	2.9
6	メキシコ	26,626	2.3
7	ウクライナ	26,187	2.3
8	インドネシア	23,564	2.0
9	南アフリカ	16,137	1.4
10	ロシア	15,862	1.4
その他		226,980	19.5
世界全体		1,163,497	100.0

C. 大豆

上位10	生産国	生産量(1000トン)	世界生産に占める割合(%)
1	ブラジル	120,701	34.6
2	アメリカ合衆国	116,377	33.4
3	アルゼンチン	43,861	12.6
4	中国	20,280	5.8
5	インド	12,987	3.7
6	カナダ	6,543	1.9
7	ロシア	6,003	1.7
8	パラグアイ	4,532	1.3
9	ボリビア	3,457	1.0
10	ウクライナ	3,444	1.0
その他		10,671	3.1
世界全体		348,856	100.0

D. 大豆油 a/

上位10	生産国	生産量(1000トン)	世界生産に占める割合(%)
1	中国	16,772	27.2
2	アメリカ合衆国	11,841	19.2
3	ブラジル	11,099	18.0
4	アルゼンチン	8,392	13.6
5	インド	1,317	2.1
6	メキシコ	957	1.6
7	エジプト	718	1.2
8	ロシア	710	1.2
9	ドイツ	646	1.0
10	スペイン	623	1.0
その他		8,497	13.8
世界全体		61,572	100.0

E. サトウキビ糖

上位10	生産国	生産量(1000トン)	世界生産に占める割合(%)
1	ブラジル	724,428	37.7
2	インド	439,425	22.9
3	中国	103,381	5.4
4	タイ	92,096	4.8
5	バキスタン	87,981	4.6
6	メキシコ	55,279	2.9
7	コロンビア	35,041	1.8
8	インドネシア	32,400	1.7
9	アメリカ合衆国	31,457	1.6
10	オーストラリア	28,669	1.5
その他		291,903	15.2
世界全体		1,922,060	100.0

F. 牛肉（骨付き、生鮮・冷蔵）

上位10	生産国	生産量(1000トン)	世界生産に占める割合(%)
1	アメリカ合衆国	12,890	18.6
2	ブラジル	10,350	14.9
3	中国	7,180	10.4
4	アルゼンチン	3,133	4.5
5	メキシコ	2,176	3.1
6	オーストラリア	1,878	2.7
7	ロシア	1,621	2.3
8	トルコ	1,573	2.3
9	カナダ	1,379	2.0
10	フランス	1,361	2.0
その他		25,806	37.2
世界全体		69,346	100.0

G. 豚肉（骨付き、生鮮・冷蔵）

上位10	生産国	生産量(1000トン)	世界生産に占める割合(%)
1	中国	55,400	45.2
2	アメリカ合衆国	12,300	10.0
3	ブラジル	5,186	4.2
4	スペイン	5,066	4.1
5	ロシア	4,532	3.7
6	ドイツ	4,492	3.7
7	ベトナム	3,102	2.5
8	カナダ	2,263	1.8
9	フランス	2,152	1.8
10	ポーランド	1,805	1.5
その他		26,287	21.4
世界全体		122,585	100.0

H. 鶏肉（生鮮・冷蔵）

上位10	生産国	生産量(1000トン)	世界生産に占める割合(%)
1	アメリカ合衆国	19,599	15.9
2	ブラジル	14,524	11.7
3	中国	14,300	11.6
4	ロシア	5,308	4.3
5	インド	4,907	4.0
6	インドネシア	4,041	3.3
7	メキシコ	3,782	3.1
8	エジプト	2,523	2.0
9	トルコ	2,418	2.0
10	日本	2,372	1.9
その他		49,857	40.3
世界全体		123,631	100.0

注：a：大豆油の生産については2021年値。

出所：FAOSTATより筆者作成。

附属表—2：主要品目別世界輸出上位10か国ランキング 2022年
(単位 1000トン、パーセント)

A. 小麦

上位10	輸出国	輸出量(1000トン)	世界輸出に占める割合(%)
1	オーストラリア	28,781	15.4
2	アメリカ	20,918	11.2
3	フランス	20,152	10.8
4	カナダ	18,548	9.9
5	ロシア	17,829	9.6
6	アルゼンチン	12,938	6.9
7	ウクライナ	11,223	6.0
8	インド	6,799	3.6
9	カザフスタン	6,346	3.4
10	ドイツ	6,222	3.3
その他		36,924	19.8
世界全体		186,680	100.0

B. とうもろこし

上位10	輸出国	輸出量(1000トン)	世界輸出に占める割合(%)
1	アメリカ合衆国	58,595	28.0
2	ブラジル	43,389	20.7
3	アルゼンチン	35,409	16.9
4	ウクライナ	25,177	12.0
5	ルーマニア	5,540	2.6
6	フランス	5,156	2.5
7	パラグアイ	4,598	2.2
8	南アフリカ	3,919	1.9
9	ボーランド	3,881	1.9
10	インド	3,486	1.7
その他		20,313	9.7
世界全体		209,464	100.0

C. 大豆

上位10	輸出国	輸出量(1000トン)	世界輸出に占める割合(%)
1	ブラジル	78,932	50.1
2	アメリカ合衆国	57,332	36.4
3	アルゼンチン	5,195	3.3
4	カナダ	4,283	2.7
5	ウルグアイ	3,065	1.9
6	パラグアイ	2,273	1.4
7	ウクライナ	2,001	1.3
8	オランダ	947	0.6
9	ロシア	779	0.5
10	ボリビア	604	0.4
その他		2,232	1.4
世界全体		157,644	100.0

D. 大豆油

上位10	輸出国	輸出量(1000トン)	世界輸出に占める割合(%)
1	アルゼンチン	4,264	34.4
2	ブラジル	2,610	21.1
3	アメリカ合衆国	635	5.1
4	オランダ	600	4.8
5	ボリビア	585	4.7
6	スペイン	381	3.1
7	パラグアイ	371	3.0
8	トルコ	311	2.5
9	ウクライナ	238	1.9
10	ロシア	235	1.9
その他		2,151	17.4
世界		12,383	100.0

E. 牛肉（骨なし、生鮮・冷蔵）

上位10	輸出国	輸出量(1000トン)	世界輸出に占める割合(%)
1	ブラジル	1,984	31.1
2	アメリカ合衆国	972	15.2
3	オーストラリア	817	12.8
4	アルゼンチン	528	8.3
5	ニュージーランド	396	6.2
6	カナダ	380	5.9
7	アイルランド	341	5.3
8	パラグアイ	336	5.3
9	ウルグアイ	316	4.9
10	オランダ	306	4.8
その他		13	0.2
世界全体		6,390	100.0

F. 豚肉（骨なし、生鮮・冷蔵）

上位10	輸出国	輸出量(1000トン)	世界輸出に占める割合(%)
1	アメリカ合衆国	1,227	19.2
2	ブラジル	985	15.4
3	スペイン	965	15.1
4	カナダ	855	13.4
5	ドイツ	740	11.6
6	デンマーク	352	5.5
7	オランダ	313	4.9
8	メキシコ	196	3.1
9	ボーランド	152	2.4
10	ベルギー	89	1.4
その他		514	8.1
世界全体		6,390	100.0

G. 鶏肉（生鮮・冷蔵）

上位10	輸出国	輸出量(1000トン)	世界輸出に占める割合(%)
1	ブラジル	4,364	28.4
2	アメリカ合衆国	3,746	24.4
3	オランダ	1,090	7.1
4	ポーランド	1,042	6.8
5	トルコ	665	4.3
6	ベルギー	417	2.7
7	ウクライナ	413	2.7
8	タイ	357	2.3
9	ドイツ	324	2.1
10	フランス	250	1.6
その他		2,705	17.6
世界全体		15,374	100.0

H. コーヒー（未焙煎）

上位10	輸出国	輸出量(1000トン)	世界輸出に占める割合(%)
1	ブラジル	2,132	27.4
2	ベトナム	1,314	16.9
3	コロンビア	630	8.1
4	インドネシア	434	5.6
5	ドイツ	318	4.1
6	ホンジュラス	311	4.0
7	ウガンダ	298	3.8
8	エチオピア	273	3.5
9	インド	270	3.5
10	ベルギー	268	3.4
その他		1,527	19.6
世界全体		7,776	100.0

出所：FAOSTAT より筆者作成。

附属表-3：日本の農水産物輸入概況（品目別）、2023年の輸入金額上位3か国リスト
(単位 百万円、パーセント)

品目名	世界からの輸入額	2023年累計金額上位3か国					
		1位	2位	3位	国名	金額構成比(%)	国名
	金額(百万円)	国名	金額構成比(%)	国名	金額構成比(%)	国名	金額構成比(%)
畜産品	2,417,363	アメリカ合衆国	23.7	タイ	11.9	オーストラリア	11.3
牛肉(くず肉)	705	オーストラリア	79.3	ニュージーランド	7.4	チリ	5.2
コンビーフ	337	ニュージーランド	59.0	ウルグアイ	24.6	フィリピン	9.0
牛の調製品(水煮)	2,295	アメリカ合衆国	93.0	オーストラリア	4.1	ブラジル	1.8
牛の調製品(その他)	905	中国	48.5	オーストラリア	33.1	ウルグアイ	17.2
鶏肉	192,374	ブラジル	65.1	タイ	33.0	アメリカ合衆国	1.8
馬肉	5,216	カナダ	29.9	ウルグアイ	19.3	アルゼンチン	16.5
農産品	6,633,972	アメリカ合衆国	18.7	中国	11.6	ブラジル	7.7
とうもろこし	689,008	アメリカ合衆国	47.7	ブラジル	42.7	アルゼンチン	4.4
とうもろこし飼料用	498,624	ブラジル	52.0	アメリカ合衆国	37.7	アルゼンチン	5.6
バナナ(生鮮)	134,436	フィリピン	79.5	エクアドル	8.6	メキシコ	6.7
レモン(生鮮・乾燥)	11,213	アメリカ合衆国	50.7	チリ	36.0	オーストラリア	4.9
ライム(生鮮・乾燥)	1,473	メキシコ	95.2	ベトナム	4.4	ニュージーランド	0.2
すいか(生鮮)	130	メキシコ	42.0	アメリカ合衆国	39.3	オーストラリア	16.3
メロン(生鮮)	2,777	オーストラリア	43.1	メキシコ	18.2	ホンジュラス	18.0
さくらんぼ(生鮮)	4,749	アメリカ合衆国	84.4	チリ	7.4	ニュージーランド	4.6
ぶどう(生鮮)	13,589	チリ	41.8	アメリカ合衆国	25.3	オーストラリア	17.4
ぶどう(乾燥)	11,282	アメリカ合衆国	66.3	トルコ	26.5	チリ	2.7
ぐるみ(生鮮・乾燥)	10,807	アメリカ合衆国	96.9	チリ	1.8	中国	0.9
キウイフルーツ(生鮮)	46,638	ニュージーランド	96.2	アメリカ合衆国	1.7	チリ	1.4
マンゴー(生鮮)	4,057	メキシコ	37.7	台湾	18.5	タイ	17.3
アボガド(生鮮)	22,483	メキシコ	75.7	ベル	22.0	オーストラリア	1.5
フルーツピューレ・ペースト	1,957	オーストラリア	39.3	メキシコ	15.7	チリ	10.1
オレンジジュース	26,240	ブラジル	49.6	イスラエル	21.8	メキシコ	19.2
グレープフルーツジュース	4,303	イスラエル	63.2	メキシコ	15.6	南アフリカ	5.7
パイナップルジュース	1,735	フィリピン	43.9	タイ	25.7	コスタリカ	13.5
レモンジュース	6,579	イタリア	39.6	イスラエル	27.2	アルゼンチン	18.3
ライムジュース	180	イタリア	29.9	メキシコ	22.7	イスラエル	13.1
ぶどうジュース	18,722	チリ	30.9	アルゼンチン	23.9	アメリカ合衆国	22.0
りんごジュース	17,015	中国	59.9	チリ	11.5	南アフリカ	7.3
クラシックベリージュース	239	チリ	47.8	アメリカ合衆国	22.4	イタリア	16.8
パイナップル(冷凍)	1,215	フィリピン	58.6	コスタリカ	23.7	ベトナム	11.5
落花生(炒ったもの)	1,712	中国	99.1	アルゼンチン	0.4	アメリカ合衆国	0.3
芽キャベツ	78	オーストラリア	33.3	メキシコ	33.2	ニュージーランド	10.4
その他のチコリー	885	アメリカ合衆国	79.5	メキシコ	18.6	イタリア	1.4
えんどう	381	ベル	54.7	タイ	19.2	中国	14.5
ささげ属・いんげんまめ属の豆	363	オースト	90.6	メキシコ	9.4		
アスパラガス	5,315	メキシコ	81.0	オーストラリア	10.5	ベル	3.5
セルリー	603	アメリカ合衆国	52.1	メキシコ	43.1	台湾	4.2
スイートトーン	25	中国	51.1	アメリカ合衆国	28.4	メキシコ	17.2
かぼちゃ	8,608	メキシコ	58.9	ニュージーランド	39.4	ニュー・カレドニア(仏)	1.0
トマトピューレ・ペースト	34,953	ポルトガル	27.3	アメリカ合衆国	24.7	チリ	17.3
アスパラガス缶詰	357	中国	55.5	ベル	41.9	スペイン	2.5
ブロッコリー	19,728	エクアドル	49.6	中国	46.6	グアテマラ	1.3
チューインガム	299	韓国	66.0	中国	25.4	メキシコ	6.8
カカオ豆	18,291	ガーナ	72.4	エクアドル	12.5	ベネズエラ	4.8
ココアペースト	9,641	マレーシア	48.4	ガーナ	25.3	エクアドル	10.7
コーヒー豆(炒ってないもの)	202,915	ブラジル	33.2	ベトナム	16.7	コロンビア	12.8
インスタントコーヒー	17,951	ベトナム	41.7	ブラジル	27.0	マレーシア	8.3
しょうが(生鮮)	3,598	中国	97.4	タイ	2.5	ベル	0.1
ぶどう酒	251,704	フランス	59.4	イタリア	12.0	チリ	8.0
大豆	309,711	アメリカ合衆国	67.8	ブラジル	17.9	カナダ	13.3
落花生(調製していないもの)	7,835	アメリカ合衆国	41.8	中国	40.3	ブラジル	6.7
菜種(採油用)	193,287	カナダ	52.0	オーストラリア	48.0	メキシコ	0.0
ひまわりの種(採油用)	1,560	アメリカ合衆国	50.6	チリ	20.1	台湾	9.6
バーム油	93,768	マレーシア	86.3	インドネシア	13.6	コロンビア	0.1
大豆油粕(調製飼料用)	140,626	ブラジル	33.9	中国	33.3	アメリカ合衆国	18.7
播種用の種、果実及び胞子	30,792	チリ	23.5	アメリカ合衆国	19.6	中国	9.5
水産物 計	2,016,016	中国	17.7	チリ	9.4	アメリカ合衆国	7.6
ぎんざけ	76,186	チリ	99.8	ロシア	0.2	アメリカ合衆国	0.0
いわし(生・蒸・凍)	367	メキシコ	59.2	ラトビア	15.4	ポーランド	15.4
いか(もんごう除く)	68,190	中国	54.4	ベル	9.8	アルゼンチン	6.1
うに(活・生・蒸・凍)	27,837	チリ	43.9	ロシア	42.5	カナダ	7.3
いか(醤製)	37,263	中国	88.8	ベル	5.0	タイ	4.1
魚油(肝油除く)	8,299	チリ	70.8	アメリカ合衆国	9.1	中国	5.7
魚粉	40,844	インド	20.3	チリ	15.1	ベル	14.0
寒天	7,036	チリ	31.5	モロッコ	23.7	韓国	17.9

出所：出所：農林水産省（2024）「農林水産物輸出入概況」輸出・国際局国際経済課、令和6年4月2日、<https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/kokusai/>より筆者作成。

附属表—4：日本の農水産物の輸入状況：輸入上位 5 か国、輸入数量、金額、単位価格の比較 2023 年

品目		とうもろこし				品目		大豆				品目		コーヒー生豆			
上位 5 か国	国・地域名	数量	金額	金額構成比	価格(千円/千t)	上位 5 か国	国・地域名	数量	金額	金額構成比	価格(千円/千t)	上位 5 か国	国・地域名	数量	金額	金額構成比	価格(千円/千t)
1 アメリカ合衆国		6,742	328,678	47.7	48.7	1 アメリカ合衆国		2,168	209,848	67.8	96,806.4	1 ブラジル		124,473	67,283	33.2	540.5
2 ブラジル		6,643	293,989	42.7	44.3	2 ブラジル		646	55,553	17.9	86,018.8	2 ベトナム		99,096	33,812	16.7	341.2
3 アルゼンチン		762	30,474	4.4	40.0	3 カナダ		324	41,210	13.3	127,054.7	3 コロンビア		34,031	26,012	12.8	764.4
4 南アフリカ		587	27,310	4.0	46.6	4 中国		18	3,084	1.0	175,860.7	4 グアテマラ		21,877	17,743	8.7	811.0
5 ウクライナ		67	3,048	0.4	45.8	5 フランス		0	6	0.0	157,918.9	5 エチオピア		15,951	13,233	6.5	829.6
その他		75	5,509	0.8	73.3	その他		0	10	0.0	155,730.2	その他		60,223	44,833	22.1	744.4
世界全体		14,876	689,008	100.0	46.3	世界全体		3,156	309,711	100.0	98,149.0	世界全体		355,651	202,915	100.0	570.5
品目		豚肉				品目		鶏肉				品目		鶏内臓製品			
上位 5 か国	国・地域名	数量	金額	金額構成比	価格(千円/千t)	上位 5 か国	国・地域名	数量	金額	金額構成比	価格(千円/千t)	上位 5 か国	国・地域名	数量	金額	金額構成比	価格(千円/千t)
1 アメリカ合衆国		226,354	137,706	25.0	608.4	1 ブラジル		404,463	125,249	65.1	309.7	1 タイ		297,810	205,037	65.3	688.5
2 カナダ		217,819	133,683	24.3	613.7	2 タイ		167,305	63,410	33.0	379.0	2 中国		173,949	104,479	33.3	600.6
3 スペイン		171,477	97,671	17.7	569.6	3 アメリカ合衆国		12,273	3,414	1.8	278.2	3 ベトナム		4,588	3,581	1.1	780.5
4 メキシコ		122,497	76,309	13.8	622.9	4 ブルコ		452	122	0.1	270.6	4 韓国		1,028	630	0.2	612.9
5 ドンマーク		57,238	34,173	6.2	597.0	5 マレーシア		97	48	0.0	490.9	5 ブラジル		558	243	0.1	435.6
その他		124,415	71,624	13.0	575.7	その他		247	131	0.1	529.7	その他		326	190	0.1	582.8
世界全体		919,801	551,166	100.0	599.2	世界全体		584,838	192,374	100.0	328.9	世界全体		478,260	314,161	100.0	656.9
品目		牛肉				品目		牛肝・乾燥果実				品目		冷凍野菜			
上位 5 か国	国・地域名	数量	金額	金額構成比	価格(千円/千t)	上位 5 か国	国・地域名	数量	金額	金額構成比	価格(千円/千t)	上位 5 か国	国・地域名	数量	金額	金額構成比	価格(千円/千t)
1 アメリカ合衆国		203,922	171,466	41.7	840.8	1 フィリピン		970,120	124,290	31.7	128.1	1 中国		551,475	142,195	46.6	257.8
2 オーストラリア		208,964	169,602	41.2	811.6	2 アメリカ合衆国		159,390	85,708	21.8	537.7	2 アメリカ合衆国		274,779	75,837	24.9	276.0
3 カナダ		42,030	27,827	6.8	662.1	3 ニュージーランド		98,776	47,108	12.0	476.9	3 タイ		44,254	14,078	4.6	318.1
4 ニュージーランド		24,097	21,225	5.2	880.8	4 メキシコ		126,775	33,637	8.6	265.3	4 ベルギー		58,014	13,441	4.4	231.7
5 メキシコ		17,319	12,921	3.1	746.1	5 オーストラリア		56,649	16,176	4.1	285.6	5 エクアドル		30,364	9,982	3.3	328.8
その他		8,314	8,120	2.0	976.7	その他		309,422	85,740	21.8	277.1	その他		162,356	49,291	15.2	303.6
世界全体		504,646	411,161	100.0	814.8	世界全体		1,721,132	392,659	100.0	228.1	世界全体		1,121,243	304,825	100.0	271.9
品目		アルコール飲料				品目		さけ・ます				品目		えび			
上位 5 か国	国・地域名	数量	金額	金額構成比	価格(千円/千t)	上位 5 か国	国・地域名	数量	金額	金額構成比	価格(千円/千t)	上位 5 か国	国・地域名	数量	金額	金額構成比	価格(千円/千t)
1 フランス		62,852	161,049	41.9	2562.4	1 チリ		130,203	151,448	58.7	1,163.2	1 インド		37,403	39,543	20.5	1057.2
2 英国		43,043	50,518	13.1	1173.7	2 ノルウェー		28,352	57,946	22.4	2,043.8	2 ベトナム		23,166	36,386	18.8	1570.7
3 アメリカ合衆国		31,169	35,804	9.3	1148.7	3 ロシア		17,636	15,343	5.9	870.0	3 インドネシア		23,918	32,880	17.0	1374.7
4 イタリア		42,958	31,746	8.3	739.0	4 アメリカ合衆国		14,290	11,140	4.3	779.5	4 アルゼンチン		13,237	17,608	9.1	1330.2
5 チリ		61,563	20,151	5.2	327.3	5 トルコ		4,360	8,492	3.3	1,947.6	5 タイ		7,993	11,006	5.7	1376.9
その他		259,766	84,906	22.1	326.9	その他		7,262	13,834	5.4	1,904.9	その他		35,392	55,794	28.9	1576.5
世界全体		501,351	384,174	100.0	766.3	世界全体		202,104	258,203	100.0	1,277.6	世界全体		141,110	193,218	100.0	1369.3

注：輸入金額は、原則として、CIF 価格 (Cost - insurance and Freight、運賃・保険料込み) で、関税額を含まない価格である。輸入単価は、財務省が公表している「貿易統計」から、農林水産省がとりまとめた「農林水産物輸出入概況 2023 年令和 5 月」から筆者が算出したものである。

出所：農林水産省、農林水産輸出入概況、輸出・国際局国際経済課、令和 6 年 4 月 2 日、

<https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/kokusai/> から筆者作成。